

生き方を考える沖縄・命の学習

大川 敏明

今年の総合学習「沖縄」4つの特徴

今年の6年生の総合学習の特徴を考えると、次の4点にまとめることができると思う。

沖縄の文化や自然をたっぷり味わう中で、子どもたちと沖縄の関わりが広がった自分たちの地域から今の沖縄の問題に切り込み、自分たちの問題として基地を考える子どもたちの中から、教育というものの持つ力とそのあり方について問題提起があった死の授業（命について考える）を総合学習「沖縄」の中に位置付けて実践された

については、学習のスタートから夏の自由研究、そして伝える会、一冊本まで、子どものテーマ学習が貫かれていたということに現れていると思う。沖縄の魅力というものが、自分たちが味わってきた自然や文化、習慣というものを通して語られている。沖縄というと、戦争と基地という印象が強く、重たいものというイメージが少なからずあったが、それとは違う沖縄の姿を子ども達は感じ取っていた。まさに、沖縄をまるごと学ぶということだろう。

については、鶴小上空を飛ぶ戦闘機を切り口として、地域の基地学習や墜落事故など重点的に取り上げ実践してきた。また、荒削りの実践だが、沖縄の問題を沖縄の問題としてとらえるのではなく、自分たちの生活とつながる問題として考えさせようとして実践を展開し、鶴小における基地学習のひとつの角度付けを作ったのではないかと考えている。子ども達がまったく意識していなかった飛行機やヘリコプターを（飛んでいるということすら意識していなかった）今までと違った視点でとらえるようになったということは、今後子ども達の生活の中で、自分の問題として再びとらえ返すきっかけと種をまくことができたのではないかと思うのである。

については、子どもたちの中から提起された問題意識が、学習旅行の中で、また学習旅行後も、子どもたちの共通土台として形作られたことである。鶴小は金城先生の証言を聞くという事もあり、今年の大きな特徴となっている。また、教科の学習とも関係しているように思う。国語で扱ってきた「北風は芽を」での朝鮮人差別の問題、社会の歴史学習の中で柱になっていた教育や中国人、朝鮮人蔑視の実態などが、集団自決やチビチリガマの問題の中で、子ども達の中でつながって行ったのだと思う。

は、1学期に学習した北村さんの授業の中で子どもたちが見せた姿は、子どもたちがこの学習の中で何を感じ取るのかを示唆するものだったように思うし、沖縄での自決というものがより一層子ども達の中で浮かび上がったように感じている。まあちゃんの授業はこの学年ならではの取り組みで、一般化はできないが、締めくくりにふさわしい授業だったように思う。子ども達は「生」というもの持つ価値と、人間のエネルギーというものを自分たちなりの視点で感じ取っていたように感じた。

今回のレポートでは、この4点にそって取り組みの実際と子ども達の姿を報告していきたいと思う。

子どもたちの学びたい・学んだ沖縄

5年生へ送ったの学習ノートから、子どもたちが残したメッセージを紹介する。

子どもたちにとっての総合学習「沖縄」というと、まず綾子のようなイメージを率直に感じて

いるのだろうと思う。6年生の思いを感じ取り、そこへの期待と決意を感じ取るのが、沖縄を伝えられる会だ。昨年の綾子のノートを見てみると、次のような事が書かれている。

「私は、今まで(そして今も)「沖縄＝キレイな海」というイメージがあった。けど、6年生の教えてくれた事は、私の想像よりずいぶん分らない。沖縄の昔だった。「日本でゆいいつ地上戦が起こった沖縄」を少しだけ分かった気がする。人をもののようにあつかい、命をかんたんになくしてしまうかなしい沖縄・戦争をもっとよく知り、深く学んでいきたい。」

しかし、その内容がリアルなだけに、「沖縄って、すっごく重たくて、暗いイメージしか持てなかった」という言葉になって、1年後に語られている。そして、「沖縄に行ったり、そのことについて勉強するにつれて、「沖縄っていい所もたくさんあるんだ」と思えるようになりました」となり、「学習旅行に行くときは、基地や戦争といった沖縄の暗いイメージだけでなく、沖縄のいい所も全部まるごと見てきてほしいです」といった形でまとめられている。

これは、教師側でも同じ思いを持っている。沖縄をまるごと学ぶなかで、「今の沖縄の問題を考えるとほしい」沖縄は、戦争と基地を学ぶためだけに学習するのではない。その文化や自然の豊かさ、人々のあたたかさ、子どもたちが学ぶ価値の大きいものだ。

「私は、早く沖縄に行きたいなと思いました。その理由の一つ目は、サンゴがとてもきれいな海で泳ぎたいことです。6年のかみしばいで水がとてもすきとおっていたと言っていました。そんなきれいなところで泳ぎたいなあと思いました。(中略)3つ目は桃子さんが言っていたけど、基地によって海が請わされると言っていた。私はやだな。だってキレイなサンゴがこわされるんだもん。やっぱり自然は残したほうがいいよ。」(陽子)

「ぼくが沖縄のことでしりたいのは、「ごう」と「命どう宝」のことをくわしく知りたい。(中略)

まだまだ知りたいことはいっぱいあるけれど、一番知りたいのは沖縄はどんな所か、ぼくが思っているような所なのか全然ちがうところなのか、それが一番知りたいところだ。」(誠)

「自分が学んでみたい事 まず、琉球とは何なのか、琉球王朝時代とはどんな時代だったのか。お姉ちゃんが6年生の時おみやげに琉球ガラスというワイングラスを買ってきたので、いい何なのかを調べてみたい」(麗子)

子どもたちが持っている沖縄のイメージは様々だが、戦争・基地というのが一番には出てこない興味を中心ではないように思う。海・動物・暑さ………・そんな興味は6年生の子どもたちにとって自然なものだと思う。そして、沖縄にぐっと引き付けられる要因になる。

沖縄の文化や自然、自分自身のこだわりを持つ中で、沖縄に対する愛着と思いが深まっていく。「自分なりの沖縄」というものが生まれてくるのだと思っている。この「自分なりの沖縄」というものがとても大切だと思う。和光には「沖縄病」という言葉があるが、この「沖縄病」の子どもたちをたくさん作れるかというのか、実践の大きな目標になるのではないのか。

子どもたちが今の沖縄の問題を見ると、これはいいこと・悪いことというものさしだけでなく、あの の沖縄がこんな目に遭っている、こんな状況に置かれているという問題のとらえ方や感じ方のほうが、はるかに自然であり子どもたちにとっては分かりやすい。(当然、6年生はもっと深いレベルの感じ方ができるのだから、もっとも根底にある動機はあながいそのような物の影

響が大きいのではないかと思う)

「沖縄ではまだ戦争が続いているのだと思う。死ぬのが人間じゃなくて海の生き物に変わっただけ。海……それは大事な大事な沖縄の財産だ。海の生き物、沖縄の生き物をころすということは、沖縄を殺すということ。沖縄をころすのは、もうゼツタイやめてほしいと思った。仲間を守るためにみんなががんばればゼツタイせんそうのない、きれいなきれいな沖縄が戻ってくると思う。」(遼子)

「今日、6年生から沖縄のことをいろいろ教えてもらいました。沖縄の家は台風から家を守るためにコンクリートでできていて、かんぱんもないんだと思いました。沖縄は海がとってもきれいなことは知っていました。しかし、戦争などで、とってもよごれたのではないかと思いました。」(晶)

これらが、今年の実践を組み立てていく時の、ひとつの基調になっていたと思う。また、最初は「基地」が子どもたちから遠いというとらえから、沖縄学習旅行後に重点を置いていこうと考えていた。

このような仮説を持って、今年度は沖縄の文化や自然をじっくりと味わうことを1学期の重点として、多くの時間をさいた。まず、沖縄の特徴を伝えるいくつかの授業を組んで、子どもたちの興味・関心を耕す取り組みをした後、自分たちのテーマを決めて取り組んでみるという形だ。

しかし、計画を立ててみると、テーマ別活動にはいれるのは6月くらいなので、夏前に形に仕上げるとするのには難しいと判断して、1学期の終わりは中間発表とし、簡単な報告をするという程度にした。そのかわりに、発表は夏休みあけとして、自由研究で自分の選んだテーマを深め、まとめるということ提起して実践に取り組んだ。

沖縄の自然・文化を学ぶ

指導計画は次のように立てた

総合学習「沖縄」1学期の学習プラン

今年重点において進めたいこと

「沖縄を魅力的なところだ」ととらえることが、子ども達の平和学習を深める事になるという事を明らかにする

「これらの事前学習が(食べ物を作る・エイサー・空手)は確実に子どもの中に残っていた」(成田レポート)「……こうした土台があることで、今の沖縄の課題、そこにつながる沖縄戦、その後の占領下の時代が、より鮮明に刻まれていくのである。」(吉松レポート)

子ども達にとっての基地学習の道筋を追求していく。疑問や問題意識の入り口は何なのか
「小学生が学んでいく上で基地問題はかなり難しい面がある。「沖縄戦」から「今の米軍基地問題」への飛躍があるようだ……沖縄を考える上で、「沖縄戦」を出発点としてとらえ、「占領下の沖縄」そして「復帰運動」「復帰後の沖縄」という流れをつかまないと子どもにみえてこないだろうと考えた。(吉松レポート)6月のまだ基地の学習が始まる前から、子ども達の目は「基地」に向けられていった。そのきっかけとなったのは沖縄からとりよせた新聞である……。

沖縄国会見ていた子は多かった。……子ども達に基地を最も身近に感じさせたのは、「横田基地のアウトマーカーが柚木にあります」という一言だった」(成田レポート)
 「ヤンバルクイナを例にとっても、米軍の支配と基地の存在にぶつかることに、子ども達は驚いた。……特に赤土被害でいえば、単なる開発による環境破壊ではなく、米軍の実弾演習によって崩された山の赤土が、川に伝わって海に流れだし、珊瑚を死滅させてしまっているのである。」(鎌倉レポート)

1学期に取り組みたいこと

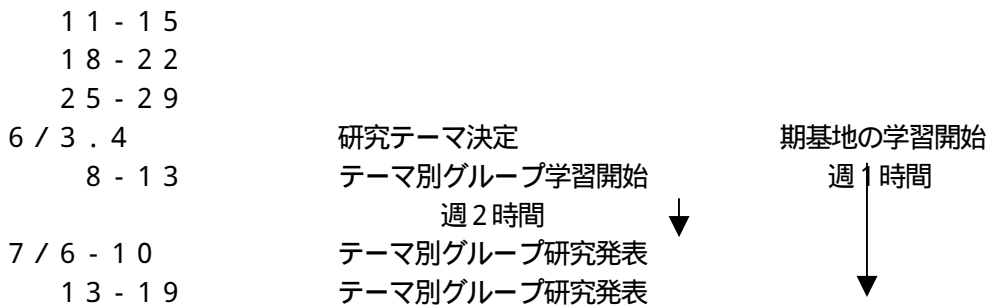
期	沖縄を通して学ぶこと		
	・沖縄を伝える会	……	済み
	・小さな語り部達の記録	1	5 h
	・97年度学習旅行ビデオとビデオづくりについて		1 h
期	沖縄発見 自然・歴史・文化		
	・作り、体験する活動	シーサーとミニシーサー作り(小菅)	2 h
		沖縄の産業 砂糖の精製(宮津)	2 h
		長寿の島沖縄 食文化とゴーヤチャンプルー	2 h
		沖縄の民舞や音楽など 表現に関わって	2 h
	・知る学習	沖縄の自然 珊瑚礁の島 他	2 h
		差別されてきた沖縄 歴史	2 h
	・沖縄新聞レポート	学年で一部を取り寄せて	
	・テーマ別研究	2コマ×4週	
		発表を2コマ×2週	
		テーマ別研究は、1コマを総合・1コマを自治文化のコマで	
期	基地の島 沖縄		
	・日本でなかった沖縄	1	h
	・基地の島沖縄		
		どうして基地ができたのか 伊江島	1 h
		今の基地	1 h
	・基地の被害	嘉手納小学校	1 h
			後2時間程度
	総合学習のコマ	2	4時間
	自治文化のコマ		8時間
	合計	3	2時間

* 基地見学については、子ども達の実態を見ながら、2学期のどの時期にいれるのかももう少し検討していきたい。夏休みの基地見学の課題についても今後検討していきたい

* 期の授業については、新しい教材の発掘も考えていきたい

4 / 13 - 17	期	沖縄を通して学ぶこと
20 - 24	期	沖縄発見開始
27 - 5 / 1		週2コマで1テーマの授業

5 / 5 . 6 . 7



実際は、まず両担任が授業をした。大川は沖縄の歴史についての授業を、北山先生は食についてを担当した。園田先生には自然を、小菅先生にはシーサー作りを指導してもらった。砂糖づくりは運動会の日程などとも重なり、全体で取り組むことはできなかったのだが、梓がテーマ別研究の時に、指導してもらうことができた。

歴史については、城・絵・酒・言葉など実物や写真を使って中国と比較しながら、琉球王朝時代の交易と文化の特徴についてを扱った。また、薩摩進入から戦後までの差別と支配の歴史について簡単に触れていった。その中で、沖縄の文化の豊かさの理由と、今でも日本の中で差別的な扱いを受けていることを浮かびあがらせたいと授業を計画した。

食の中では、ゴーヤを実際に食べてみたり、調理をし食文化の特徴と優れた点などを扱っていた。自然では、サンゴ礁とそれが地球環境に果たしている役割についてを学習した。

ニュースレポートに取り組む

6月に入ってニュースレポートを始めた。予定よりも取り組みが遅れてしまったが、日常的に新聞が手に取れるので、時折ながめているという様子も見えた。順番レポートし、朝の会で発表して掲示していった。このレポートも沖縄の文化や自然を知るのに役にたった。子どもたちがレポートした内容は以下の通りだった。

< 自然や動物に関わるもの >

ハブは捨てるどころなし・ハブクラゲに刺され死亡・ヤンバルクイナ人工ふ化に成功・ツマグロゼミを聴く会・月桃の可能性を探ろう・ホウボウオウ満開・遅い台風の発生・シンリンオオカミについて・歓声いっぱい湧き水の夏・砂漠にも緑の植物できた・イリオモテヤマネコ幼獣死ぬ・海の危険生物・マンタ生態研究始まる・西表島のヤエヤマヒルギ・移入マングースの種判明・見事に判明したサンゴ・沖縄の人は鉢植えが好き・コアラのお嫁さんあらわる・当世 沖縄県物産事情(沖縄の天然ゼリー)・(20)

< 戦争・基地に関わるもの >

那覇空港軍民共用・やめる米軍の降下訓練・戦争の爪痕を後世に残そう・海上ヘリポート・嘉手納爆音訴訟確定・集団「自決」の実態後世へ・沖縄の基地グアムへの移転の可能性あり・沖縄戦 200 人体験ビデオ化・体内の破片送る(9)

消波ブロックの下ごみの山・パソコン使い120ドル札を偽造・みんなで作った大添公民館・ハンセン病の松岡さん立教大で公演・1万人のエイサー踊り隊・中学にシーサー来ました

テーマ別研究から夏の自由研究へ

夏の自由研究までをにらんだ取り組みなので、何をテーマに選ぶかについては、丁寧な取り組みをおこなった。まずは、担任が子どもたちの声を引き出しながら、取り組みそうなテーマをできるだけ出した。そして、やってみたいと思うテーマごとに集まって、中身を深めさせた。それを一定期間張り出し、さらに新しいテーマを作ったり、テーマを移動したりして決定した。

子どもたちの選んだテーマ

シークアーサーの育ち方を調べる	シークアーサーを使った料理
シーサー作り	シーサー調べ
絶滅しそうな動物とその原因	沖縄にしかいないめずらしい動物
沖縄の方言・言葉	
沖縄戦の様子.....途中で消滅して、基地に変わった	
沖縄の交通	
沖縄にはどんなお菓子があるか	
沖縄の今までの歴史	
石垣島の八分酒ずき	
沖縄のさとうきび	
沖縄の立体地図模型.....途中で消滅した	
突破口がなかなか見つからなかったシークアーサー	

意外に資料や人に巡り会えなかったシークアーサー。沖縄の農家や農協なども子どもたちに紹介したが、突破口にはならなかった。育ち方を調べた順子と輝聖は、夏休みも取り組みを続けたが、ほとんど収穫がなかったようだ。シークアーサーを使った料理では、夏休みもそのままのグループで活動をし、シャーベット作りなどに取り組んでいた。伝える会でも同じようなメンバーでシークアーサーの紹介とジュースのふるまいをしていた。メンバーは斐沙子・史子・来夢・達也・藍だった。

シーサー作りを極める祐策・州平

教師の強いアプローチで生まれたこのグループは、光彬・光生と4人で秋まつりまで活動がながっていった。授業の中でのシーサー作りの面白さをばねにして、このグループは毎時間製作を続けていった。回を重ねるごとに作り方もうまくなり、バリエーションも増えていった。

夏の研究は、そのままのメンバーで、シーサー調べに取り組んでいた。

一冊本まで続いた天然記念物

絶滅しそうな動物を取り上げた綾子は、その取り上げ方の難しさを発見していた。博物館から手紙が返ってこないなど、調べるのにかなり苦労していた。夏に分厚い資料(本)をしっかりと噛み砕き、発表していた。一冊本で天然記念物を取り上げたメンバーに調べ方のアドバイスをしていた。綾子は伝える会でも、このテーマにこだわり、仲間をひっぱり分厚い冊子を作り上げた。

裕美・晶を中心にした天然記念物のグループは、伝える会、一冊本のテーマにまでこれを継続させていった。晶は「ヤンバルクイナと絶滅の動物」裕美は「沖縄の天然記念物」といった具合だ。子どもたちの興味が強い分野だが、なかなか深まらないテーマでもある。基地や開発の問題と結びつけて角度をつけていくと、広がると考えているのだから、そのような方向まではなかなか広がりがなかった。

趣味の世界と結びついて 交通と方言

交通は、言わずと知れた裕紀が選んだテーマだ。夏は沖縄に行き、調査をしてきていた。那覇交通のバスの模型まで作ってきた。鉄道がないというのも沖縄の特徴である。戦争とのからみでそういった話が語られていた。

方言のグループは菜の葉・杏子・芽里・みずきだ。マンガの連中には、沖縄戦か学徒隊の証言をマンガにさせたかったのだが、アプローチして蹴られてしまった。そこで、方言で作る童話や紙芝居などを薦めたが、マンガの吹き出しを方言に変えるというものに落ち着いた。

独自の世界を追求する さとうきびと八分杯

直は、父親の知り合いに詳しい人がいるというので、石垣島の八分杯についてを調べ始めた。最初はインターネットを使ってかなりの資料を手に入れて、夏休みにはその人に話を聞いたり、実物を手に入れたりして、自分でも実際似作っていた。八分杯とは、教訓杯ともいい、サイフォンの原理によって八分目まで注ぐと一気に中身が全部流れ出すというものだ。別名「腹八分目茶碗」といい、欲張らず控えめにという大切な事を表すのだそうだ。沖縄らしい物だと思う。実際に流れ出してしまうのを見て、みんなも驚いていた。

もうひとつ面白かったのは、梓の取り組んださとうきびだ。何をやるか迷っていたので、進めてみたが、宮津先生の協力を経て黒砂糖の精製にまでたどり着いた。梓らしく、毎時間こつこつとさとうきびを万力をかけ、汁を絞り出してためていった。1学期の終わりには、みんながなめるのに十分な黒糖ができあがった。「本当に砂糖になった」と周りの驚きも大きかった。

夏休みには精糖工場に手紙を出して、その作り方を調べた。基本的な方法は、梓の人力製法と同じ事、また、さとうきびは台風や害虫に強い事、また節で切って埋めるとそこから芽が出てくることなど、今まで知らなかったことが分かった。沖縄の産業までは行かなかったが、今後深めてみたい分野だと思う。

子どもたちに何が残ったのか

夏休みの自由研究は、1学期のグループ研究を継続させた作品が多かった。そういったことから、共同作品が8組と、個人作品が14人というようになった。ただ、グループだからこそ深まらないという現実があって、例年よりも夏の研究が深まらないという印象も否めなかった。

子どもたちにとってこの取り組みがどうだったのか、学習旅行前に書かせた、「今までに自分が学んだことと、学習旅行で学びたいこと」の文章からいくつか紹介しておきたい。

私が一番心に残っている事は、グループ学習での、シークァーサー調べです。私は最初シークァーサーはみかんみたいに、手でむいて食べるのかと思っていました。でも、沖縄では手でむいて食べずにシャーベットに使ったり、魚にかけたりして食べられていることに驚きました。そこ

で私たちは、実際にシークァーサーのシャーベットを作ることにしました。……（斐沙子）

私は沖縄の果実「シークァーサー」の事を調べた。シークァーサーは別名「ヒラミレモン」という名もある。調べなければ分からない事だ。シークァーサーは沖縄にしかないらしい事、私は果実ひとつでいろいろな事を知り、学んだ。私にとっての総合学習は「戦争」を学ぶより、「沖縄って何があるのか、どんなものがあるのか」というような、地理っぽい感じた。（順子）

沖縄の料理は、ニラとかトウモロコシ、ゴーヤなどをいためたチャンプルーが多い。沖縄は豚のあらゆる部分を食べる。（昔、沖縄から日本本土に豚が伝わってきたとか）夏休みの宿題では、実際に沖縄料理の店に行って自分で料理を作ってみた。一番気に入ったのはフォーチャンプルーだ。……とにかく沖縄料理はうまい！（一慶）

子どもたちは、自分が取り組んだテーマについてはそれぞれ思いを持ち、こだわったように感じている。それが5年生に伝える会の中に反映されていったように思っている。

< 伝える会のプログラム >

- | | |
|--------------|-----------|
| ・沖縄の方言クイズ | あゆみ・陽子・桜子 |
| ・沖縄にいる天然記念物 | 晶・万里重・裕美 |
| ・沖縄の自然破壊について | 綾子・梓・誠・光彬 |

10

- | | |
|---------------|-----------------------|
| ・シークァーサーの味と特徴 | 斐沙子・史子・藍・久爾・和輝・輝聖・達也 |
| ・沖縄のおかし | 仁美・菜の葉・美穂・遼子・麗子・芽里・佑斗 |
| ・ゴーヤのおいしさ | 一慶・隆・拓海 |
| ・シーサーについて | 州平・祐策・光生・ |
| ・沖縄の音楽 | 順子・杏子 |
| ・沖縄と東京の町の違い | さやか・直 |
| ・沖縄の交通 | 裕紀・遼 |

伝える会にむけて、新しいテーマに挑戦するメンバーもいて、あらためて沖縄の文化を体験し学ぶという取り組みになった。準備時間も保証して、2週間くらいの準備期間をとった。料理あり、ジュースあり、おかしありの豪勢な会になり、かなり時間超過してしまった。

最後に、それぞれの研究がどう全体のものになったのかという点だが、交流したり、またある子はテーマを変えて活動してくる中で友達からその蓄積を学んだりということがあったのだろう。テーマ別活動には乗り気でなく、はず向かいだった遼子は、こう書いている

私が今年、総合学習で学んだ事で一番心に残った事はグループ活動です。テーマ別にいろいろな事を調べて発表して沖縄のいろんな文化を学びました。シークァーサーや方言や動物の事、いろんなテーマがありました。私は沖縄のおかしのグループに「食べられるから」という単純な理由で入ったのですが、その事が後ですごく悔やまれました。でも、発表の時にいろいろなグループの発表を聞いて昔は日本ではなかった沖縄の独特の文化を学びました。

少なくとも沖縄の文化や自然が、子どもたちの沖縄への間口を広げている事は事実だろう。

< 資料 > 夏の自由研究テーマ

沖縄料理	陽子・桜子	マングローブ	久爾
沖縄の方言 名探偵コナン	拓海・隆	沖縄の動物たち	綾子
沖縄の動物	裕美・晶・誠	沖縄料理の本	美穂
私が調べた沖縄戦・琉球王国	万里重	沖縄の歴史 遠	
沖縄のおかし	麗子		
シークァーサー	斐沙子・史子・藍・来夢・達也		
イリオモテヤマネコ・沖縄の始まり・有名な場所、物	光彬		
沖縄の料理 一慶			
沖縄の方言 ガラスの仮面	菜の葉・杏子・芽里・みずき		
沖縄のさとうきびレポート	梓		
教訓杯	直		
シーサー調べ	光生・光彬・祐策・州平		
沖縄のおかし	仁美		
沖縄までの距離	遼子		
沖縄の交通	裕紀		
シークァーサーを求めて1ヶ月	順子・輝聖		
沖縄の先蹟調べ	和輝		
シーサーアンケート	さやか・あゆみ・祐斗		

鶴小の空はだいじょうぶか？

基地学習への挑戦

基地の学習については、夏休みの間どうするかをずっと考えていた。当初は学習旅行後にウェートをかけて、基地見学も旅行後と考えていた。しかし、毎日自分の自宅上空を飛ぶ米軍機を見ながら、この問題に切りこまずに鶴小の沖縄学習は成り立たないというように考えるようになった。これだけ身近に今の日本や平和を考える教材が、子どもたちの実感をともなって存在するのだ。騒音・音というものは、子どもたちが沖縄に行って真っ先に実感し、強い印象に残るものである。それは、1学期の授業公開でおこなった基地の授業でもあきらかだった。

何をきっかけに子どもたちに問題提起していくのか、子どもたちが自然に受け入れられる切り口とは何なのかが大きな問題だった。そんな時、神奈川上空で米軍機と日航機のニアミス事故の報道があり、続けざまに三沢所属機の墜落事故、沖縄のヘリコプター墜落事故と事件が続いた。相模原上空といえば、すぐ目と鼻の先だ。思わず原町田や緑区の墜落事故を思い出した。これを教材に使えないか、そう考えているところに裕紀からの暑中見舞い、中には那覇空港の軍民共用の危険な実態について書かれていた。「これでいこう」と、2学期の学習プランを大幅に変更した。

最初のプランは次のようなものだった。

98年度 総合学習「沖縄」2学期プラン

<重点にして実践していきたいこと>

日常的に鶴小の上空を飛ぶ自衛隊機・米軍機が存在を、子ども達がどのようにとらえられるのか

・世田谷とは違う地域性から、基地への切り込み方があるのではないか

- ・落ちることはないのか、落ちたらどうなるのかを知ったとき、自分たちにとって遠い問題ではなく、切実な事実としてうけとめられるのではないか
沖縄戦の悲慘さ = 友だち・肉親の死 という子ども達の捉え方を考えて、命の学習との接点を具体的な実践の中で探る
- ・1学期に学習した死を前にしての生の素晴らしさを感じた子ども達は、同じ死を迎える中でもどんな質的な違いを感じるのか
- ・死というよりも、生を奪われる戦争.....特攻、自決、集団自決、切り込み、天皇陛下バンザイ その死への動機 その対極の命どう宝
- ・命の授業の流れに、沖縄戦の事をテーマとして取り上げていけないか

授業・活動の計画

期 基地の島 沖縄（自分たちと基地） 子ども達に投げかけながら継続的に

- | | |
|------------------------|---------|
| 鶴小の空は大丈夫か.....日航機 ニアミス | 1h |
| 鶴小上空を飛ぶ飛行機 | 授業と平行して |
- ・上空観察
 - ・調べてみよう 「どここの国の、何をするために、なぜここを飛んでいるかの」

13

神奈川県の基地.....いろいろな基地がある
なぜ基地があるのか.....安保条約・日本を守るのか
墜落事故.....横田基地と厚木基地の交差点 真光寺

- ・基地見学.....横田基地か瀬谷通信基地？

期 戦争と沖縄 9月4週から

- | | |
|-----------------------------|----|
| ・アニメ「対馬丸」 | 2h |
| ・沖縄戦 | 2h |
| ・丸木先生の特別授業 丸木先生と沖縄 学んでほしいこと | 2h |
| ・チビチリガマとシムクガマ | 1h |

期 学習旅行

- | | | |
|-------|---------------------------|----|
| ・準備期間 | 南部戦跡 自分たちの回るコース 証言者の人への手紙 | 1h |
| | 先輩からのメッセージ | 1h |
| | 学級集会 沖縄で学んできたこと | 1h |
| ・学習旅行 | 宜野湾小学校との交流 嘉手納基地見学 | |
| | 南部戦跡 | |
| | 渡嘉敷島の集団自決 ビーチ | |
| | 首里、博物館見学・ショッピング | |
| | 学級集会・私の平和宣言 | |

期 わたしちの見た沖縄

- ・深めてみたい疑問
- ・命の授業 沖縄と関連したテーマで 沖縄戦での死を考える

- ・沖縄学習旅行記
- ・わたしたちが見た沖縄
- ・5年生に伝える会
- ・親に伝える会

基地に関する実際の取り組みは以下のようなだった。

・導入	嬉野 京子さんの写真を見て	1 h
・基地の被害	嘉手納町屋良小学校の生活 子ども達の作文 騒音の体験	1 h
・なぜ沖縄に基地が	ビデオ「人間の住んでいる島」 伊江島 阿波根さん	1 h
・鶴小の空はだいじょうぶか	沖繩ヘリ墜落事故 那覇空港 日航機ニアミス事故 (新聞記事から)	1 h
・学校上空の飛行機を見てみよう	(屋上で授業をして待つ)	
	14	
・嘉手納小学校 山本先生に聞きたいこと	ブックレットを使って 宮森小学校墜落事故	1 h
・山本先生の特別授業		1 h
・嘉手納町のみぐあい と嘉手納基地の大きさ	地図を使って 基地がある場合とない場合の人口密度 米軍住宅と思いやり予算	1 h
・反戦地主 池原秀明	ビデオ「ドキュメント人間劇場」	1 h
・神奈川県にある基地	写真を使って	1 h
・自分達の住んでいる所と基地・騒音	地図に6年生の家をマーキング	
・瀬谷通信基地見学	土地返還訴訟原告 森さん 上瀬谷基地問題懇談会 成田さん	
・映画「パパママバイバイ」	緑区の米軍墜落事故	2 h
・沖縄学習旅行	嘉手納基地見学・米軍ひき逃げ事件 安保条約と日米地位協定	
・下鳥先生の特別授業	原町田米軍機墜落事故 米軍機の飛行ルート	2 h

沖縄の人は差別されている

1枚の写真を見て

基地の島「沖縄」の導入は、嬉野京子さんの1枚の写真から入るという定番の授業で行った。拡大した写真を見て、気がついたことを出させていくと、右側通行である事や事件の状況などが見えてくる。その時の様子を嬉野さんが書いているが、子どもたちの発言を補う形で読んで聞か

せる。

ひき殺した米兵が死体を前に立っているのに沖縄の警察は、捕まえることも、取り調べることもできない。無権利の沖縄の人にとっては、自分のシャツをぬいて死体にかけてやるのが精一杯の抗議であった。

祖国復帰直後の事件を取り上げる中で、それまで占領下にあった沖縄や、復帰後も米軍が絶対的な優位性を保っている事が浮かび上がっている。日本であって日本でない沖縄というものを、1枚の写真から感じ取っていくことができる。

嬉野さんがこの写真を撮って、命からがら沖縄を脱出する話などもして、当時の緊迫した状態なども、子どもたちを驚かせた。また、沖縄に基地がどのくらいあるのか、沖縄について基地の数が多い所はどこか(神奈川県)ということも、自然に子どもたちの中にはいっていった。

沖縄の人は差別されている。子どもをひいたのに、あの態度はひどい。どうして基地の車が事故を起こしても日本人が検査できないのだろう。本島の4割近くが基地なのには驚いた。沖縄の人はかわいそう。へんなことばかりだ。(久爾)

よく分からないけど、神奈川県と同じ面積の4割近くがアメリカの土地になっているわけか。あのさあ、アメリカから沖縄に戻る時、基地は無くさないって条件付きだったわけ？

(杏子)

6才の女の子がかわいそう。幼稚園に行く事ができなかったから、かばんをいつもさげているなんて、すごーくかわいそう。しかも、あのトラックにひかれて、シャツをかけてあげる事くらいしかできないなんて、なんか、こんな事故って信じられない。しかも、あの兵隊たち、すごーくむかつく。悪くないって顔して！

沖縄ってすごーく基地があるなー。昔、私がずっと住んでいた神奈川県に21個も基地があるなんて。沖縄ってすごーく場所を基地に取られているんだ。すごーく信じられない。(万里重)

すげー音がうるさいから、

授業時間が短くなっちゃうんだ

屋良小学校の生活を考える

2時間目には、基地の騒音を取り上げ、子どもたちへの導入を進めた。この題材を選んだ理由は2つある。ひとつは騒音というものが子どもたちに入りやすいものだということと、同じ小学生の学校生活に関わる問題で、自分たちと比較したりイメージしやすいと考えたからだ。

授業は屋良小学校のことを扱った山本先生著のブックレットを使って進めた。まず、その中の子どもの作文を読むところから授業を始めた。地図でカデナ基地の位置を大きさ、基地の写真や概要を押さえた。授業のメインは、騒音の被害だ。年間の爆音回数と時間だけでは、そのすごさを実感することはできない。

そこで、まず騒音で中断する授業時間を1日、1年間というように計算していく。すると一回の爆音で約1分の中断となる。1時間の授業に平均10回の爆音があるので10分の中断となる。

これを計算していくと、6年間の授業時間の2年分は授業が中断していることになる。和光でいえば、4年生でもう卒業ということだ。2年分勉強が遅れるという事はどういうことかも考えてみた。

また、騒音といっても実感がない。屋良小学校の屋上での最高値は1995年度で107デシベル。これは子どもに出した資料によれば、自動車のクラクションを前方2メートルで聞いた時の音の大きさとなる。数値としては不正確だが、ラジオのノイズ音を用意して、子どもたちに聞かせた。その中で子どもたちに話しかけても聞こえない。「こんな中で授業ができるだろうか?」という問いかけに、子どもたちは頭がおかしくなるといって驚いていた。授業公開だったが、親からの連絡帳でも、音の実感を伴ったことで授業が生きていたという感想をもらった。なぜ、こんな被害があるのに基地があるのかということが子どもたちの中で話されていた。また、1968年のB-52の墜落事故についても、今後の学習のために触れておいた。

中学年あたりで卒業するなんてぜったいいやだー。でも、あんなにうるさく、いらいらする音がしょっちゅうなるなんて、私はたえられないと思う。もしも、ここが基地の近くだったら、こんなふうになってしまうことだろう。命もあぶない……。沖縄の人がかわいそうだ。(ぎもん) どうして基地があるの?(美穂)

2年間くらい、授業ができないなんて、なんか……?この学校ではうるさくてかわいそう。毎日どきどきしといるのかな?(達也)

音がうるさいのはやだよ。墜落は心配というよりこわいよ。1時間10回もなるなんてめいわくだ。墜落するとか考えるとこわくてねむれないと思う。沖縄の人のめいわくもかんがえてほしいと思う。(州平)

ラジオの雑音を聞いたときはびっくりした。一時的だったらまだ大丈夫かもしれないけど、ずっとあの音が流れていたらイヤだよ、だれでも。体験した事はないけど、あのラジオの雑音以上の音が平気でながれているんだから、大体想像できる。

作文にも書いてあったけど、あんな音が年がら年中ながれていたらイライラすると思う。ただでさえ排気ガスでかんきょうを悪くしているのに、基地があることで悪い事だらけじゃないか(直)

鶴小の空はだいじょうぶか

2学期最初の授業

基地問題に切りこもうと決めて、最初の導入授業を行った。入り口は祐紀からの暑中見舞いの紹介から始めた。みんなが今度行く那覇空港が危険とはどういう意味なのか。それを考えてまず子どもたちに示したのは、その年の沖縄タイムスの記事、「軍用機の利用が突出・年間2万5回民間機の安全を脅かす」というものだった。そして次に7月23日の、宜野座村のヘリ墜落事故を紹介した。住宅地からわずか1.5キロの場所で起きた事故だ。次は、7月24日に起きた三沢基地の米軍機離陸失敗炎上事故。立て続けに起きた夏休みの事故だ。最後に子どもたちに今日のメインの記事を見せた。「実は、このすぐそばで同じような事件が7月19日に「げー!」「やばいよー!」と一時騒然となった。

子どもたちの話を聞いていると、日常的に鶴小の上空を飛んでいる米軍機を自覚している子が

極端に少ないことが分かってきた。音がしているという感覚もない。慣れというか、意識していないという事の怖さを感じた。音がして、空を見上げてみるという経験をしていないのだ。「うちの学校の上は、ほとんど飛んでいないよね」という声が出でくるくらいだ。

「それじゃ、一度意識して見てみようよ」
「どうやって？」
「屋上で授業をするっていうのはどう？」
「えー、暑いよ」
「いいじゃん、やろうよ」

賛否両論だったが、時間を作っては屋上にいすを運び出し、模造紙を壁にはって黒板がわりにして授業をした。そういう時に限ってあまり飛んでこないのだから、何度か上空を横切ることがあり、そのたびに授業は中断した。その後、教室での授業であっても、米軍機が飛んでくるところを発見した場合はみんなに知らせ、授業は無条件に中断、席をたって見るというのが暗黙のルールとなった。

「鶴小の空は大丈夫か」という問いかけの反応は2分した。住まいの上空を飛んでいるという子どもたちは、今回の問いかけに反応を示した。梓の反応がその典型的なものだった。州平は、それから毎日のように夜自宅上空がどうだったかなどを報告にきた。これからの実践で、子どもたちが自分の学校の上空を意識して見れるようになるか、それが鍵だと思った。

今までは、なかなか基地というものを、学習旅行前にとらえきれなかった。沖縄に行き、実際に見て騒音を聞いて基地というものを強く実感してきた。そして、沖縄の基地を通して、自分たちの地域をあらためて見るという実践の構造を考えていた。

しかし、今回はなんとかして自分たちの地域の基地や米軍機の問題を身近にとらえて、そこから沖縄の基地や現状を捉えることができないかと考えるようになった。つまり、「沖縄を通して自分たちを見る」から「自分たちを土台にして、沖縄をとらえる」の転換を図るということである。

この授業での子どもたちの反応は以下のようなようだった。

総合学習沖縄

鶴小の空はだいじょうぶか？

- ・うるさい。とばなきやいい。他のところをとんでくれれば。(いっけい)
- ・つらいくしたらどうしようと思うが、だいじょうぶだと思う。もしつらいくしても、学校がぼろはんシステムをつければ？でもその金は学校ではらえ(めり)
- ・せんとうきといっぱんきがぎりぎりにとありすぎたりはこわいと思うし、じじつにびっくりした。つらいくしたのがたまたま米軍基地ただけであるのにびっくりした。(さやか)
- ・べつに沖縄に近いわけじゃないから、そんなにひくくとぶこともないと思う。でも最近すごく音が大きくなってきて、テレビを見ているときは、まったく聞こえないほどだから、ちょっと心配。(れいこ)
- ・たぶんだいじょうぶ。(かずき)
- ・だいじょうぶ
うるさい。とおらなければいいのに。(きせい)

- ・うるさいな ああうるさいな うるさいな テレビのね おとがきこえん うるさいな(らいむ)
- ・べつに、おちなければだいじょうぶだとおもうけど、もし、落ちたらたいへんだと思う。(たつや)
- ・「大丈夫」と保証できる人はいないと思う。目的ってなんだろう。目的によって確率も違うと思う。「大丈夫かよー、おい」という感じがしない。(きょうこ)
- ・だいじょうぶ だいじょうぶ こんなんでいちいちなやんでたら人生やってけねーよ。落ちたときは落ちたときじゃー。(なのは)
- ・うるさいって事は、空にいるっていう事は、落ちてきててもおかしくない事はないけど、まずないね。(ひさこ)
- ・あぶないと思う。あとそれから、ぼくはよく双眼鏡で戦闘機見てるよ(りょう)
- ・うーん、やっぱりよく考えてみると、大丈夫じゃないかも！だって裕樹の言っているみたいに落ちてるんだし、見たっていう人もいるんだから.....もし落ちたとしたら怖い。全員死亡だよ.....ようこもママとうるせー言ってるよ。めっちゃめいわく！でも未来のこともわかんないし.....こわいよ！(ようこ)
- ・もし鶴小に飛行機がおちてきたらとってもあぶないし、いつ大事故がおきるかもわからないから、ていくうひこうなんかとかやったりするには反対。それにテレビ(ポケモン)なんか見ているときくと、ちょーうるさいんだよ。むかつく。(あき)
- ・だいじょうぶだとおもうけど、ちょっぴりあぶねえなあ。でもこんなところでは落ちねえと思うぞ。もし落ちたら燃料すくねえなあ。
- ・今までそーゆー事は考えたことはなかったが、たしかにちかごろうるさい！そのうちふえていき、落ちるって事も？そうなんなけりゃいいが.....でも、社会でやった時思ったんだか、アメリカグループとソビエトグループの戦争にまきこまれる可能性がないわけではない。(みほ)
- ・私はこわい。いつどこに落ちてくるかわからないし、もしかしたら私の言え二落ちてくるかもしれない。最近だんだんと低く飛ぶようになってテレビもみれない。家に近づくにつれて、だんだんこわくなっていく私のお母さんお父さんお姉ちゃん、ゴマメ、クロスケ(ねこ)みんないるところにきたら.....よくテレビで見る戦争シーンを思い出す。時にはそんなこと考えて、涙をながしてしまうこともあった。
いつ落ちてくるかわからない事だけど、すごくこわい気持ちでいっぱいだ。(あずさ)
- ・大丈夫だとは言いきれない。19日に相模原、23日に沖縄で、24日に青森じゃあ、大丈夫だというほうがおかしい。ここはよく飛行機とか飛んでくるし、今どんどんふえているから。落ちてほしくなくても、止めることはできない。ねがっているだけ。今、北朝鮮がミサイルをとばしたりなんかスゴク戦争が起こりそうな雰囲気デコワイ。大丈夫なのかな。(なお)
- ・自分の家の上は、ぜんぜんうるさくない。うるさいといえば、うちのバカな兄が近所のガキらとあそんでるくらいだ。沖縄の空にくらべて、うちの空は平和だ。学校の上の空は、飛行機がとんでいるのはあまりみない。でも、毎日ブンブンとんでいるわけじゃない。でも、毎日とんでるって考えるとこわくなる。ふだんは平和な空なのに、おちてくるのはすごいこわい。だいじょうぶか、だいじょうぶじゃないかわからない。(しゅうへい)
- ・たぶんだいじょうぶだと思う。そうじゅうミスはだいじょうぶだとは言えないけど、パイロットだってしかくをもって運転しているのだから、きっとオーケーだと思う。(あゆみ)
- ・今まで、こういうことはあまり考えたことがなかったけど、「つらいく」とか聞いたらこのへんもいつかはおちるのかな.....って思いました。でもこのごろ飛行機むがおおくなってる。

- うんとくに夕方がうるさい。沖縄の人がいらいらするのわかるような気がする。(ふみこ)
- ・おちたらだいじょうぶじゃない。おちなかったらだいじょうぶ。(ゆうさく)
 - ・だいじょうぶじゃないならヤバイんじゃないの？(ひとみ)
 - ・だいじょうぶじゃないのー。まっ、おちたらおちたね.....(あい)
 - ・沖縄の問題としか思ってたけどまさか神奈川でもこんなことになるなんて、もはや人事ではない。こういう最悪の事態はかんがえたことなかったから、とくに気はとめてないけどおちないでほしい。そんなボンボンおちてもらっちゃめいわくだし。でもおちないなんてほしょうないし、もうどうにもならないよねえ。たいさく法があれば、とくにやってんの。(じゅんこ)
 - ・きけんなじょうたいであるのはたしかだとは思うけど、あんまり実感ないからあんまり不安はない。(りょうこ)
 - ・さー。はっきし絶対だいじょうぶとは否定できないけれど、たぶん「へいき」だと思う。だって、飛行機って飛んでるでしょ(高く)だから、和光小(鶴川)飛行場は近くにないし.....。てもよくわからない。(まりえ)
 - ・おちなければいいが、落ちてしまったらしかたないと思う。でもやっぱりそこに住んでいる人たちの安全はほしょうしてほしい。(くに)
 - ・このごろともうるさいし、もうちょっとしたら、ダメだと思う。だけど、そういうけいけんしたことないから、実感わかない。(ゆみ)
 - ・おちたらおちたでいいし、おちないんなら、ありがたいと思えばいいんじゃない。だぶん大丈夫だと思うけど(さくらこ)
 - ・さいきん飛行機がおおいけどだいじょうぶかもしれない。(みつあき)
 - ・危険だ。回りにおちているのだからべつにおちてもおかしくない。(ゆうき)
 - ・おちそうでおちないと思う。おちたらこまる(みずき)
 - ・おちるかもしないし、おちないかもしないし、でも、おちたらおちたでしょーがないんじゃない。よけようがないんだから。(あやこ)
 - ・おちるかもしれない。ヘリだったら風にあおられておちるかも、ジェット機はエンジンとらぶるでおちると思う。(こうせい)
 - ・いつつ、べんきょうしているときに、ゴォォォという音に、聞きあきた。もしかして、ミサイルおとされて(6日前)けいかいしているのかなー？(ゆうと)

やっぱり現地の人の話は説得力がある

沖縄の山本先生に話を聞く

偶然にも、屋良小のブックレットの著者である山本先生が鶴小に来る機会があった。1組で特別授業をしてもらう事ができた。事前爾ブックレットの中から、宮森小学校への墜落事故を紹介しながら、山本先生に聞きたい事を書いてもらった。それを集計して、答えてもらう形で授業をもらった。遼子は「やっぱり、先生の話よりも現地の先生の話は説得力がある」と話していた。

印象に残ったのは、屋良小学校の生徒たちは、こちらが思っている以上に騒音の事、基地の事を意識していないという事だ。つまり、生まれた時から基地があり、騒音がある。静かな学校というものを経験したことがない。だから、当たり前になってしまっているというのだ。このことも沖縄の問題をより難しくしていると思った。当たり前になっているという事は怖い。自覚がなくなってしまう。ある意味、鶴小のうるささも子どもたちにとって同じなのかもしれない。い

ったいこの騒音は何なのか、どうしてここを飛ぶのか、何のために飛んでいるのか、そういった事を知ったり考えたりしなければ、大人だって何の疑問も怒りも感じないのだろう。自分も学生のころから町田によくきていたが、考え感じた事はなかった。

今年の6年生は、空を見上げる大人になってほしい。そうあらためて考える話だった。

「基地に囲まれた学校」山本先生に聞きたいこと

屋良小学校や嘉手納小学校の生活について聞きたいこと

- ・先生と生徒は全校でどの位いますか
- ・沖縄の遊び（よくみんなが遊んでいる遊び）はなんですか
- ・耳せんとか持ってきてもいいのですか
- ・騒音対策は何かありますか
- ・上を飛ぶ飛行機は、最高どの位うるさいですか
- ・耳せんとか持ってきてもいいのですか
- ・一番うるさいのは、朝・昼・夜のいつですか
- ・戦闘機が一回もこない日はないのですか。
- ・何分に何回位音が聞こえるのですか
- ・もし、窓を開けたらどうなってしまいますか
- ・こまかくがやぶれるほどうるさいですか
- ・窓ガラスが割れたことはありますか
- ・1日に通る飛行機の数と同じですか
- ・何分に何回位音が聞こえるのですか
- ・どの位の人がうるさいと感じますか
- ・あまりにも騒音がひどくて、途中で帰るということはありませんか
- ・騒音で授業ができない事があるのですか
- ・騒音がある時、授業はどうしているのですか
- ・1日何時間くらい静かに勉強できるのですか
- ・東京の小学校より、授業時間は少ないですか
- ・音がするたびに授業を中断していたら勉強がおくれないのですか。また、どうやって遅れをと
りもどすのですか
- ・授業ができなくて、みんなバカにならないのですか
- ・いつもうるさくて転校したいと思いませんか
- ・通学中に影響はありますか
- ・米軍の人が時々来ませんか
- ・むかつきませんか

嘉手納基地について聞いてみたいこと

- ・基地に入ったことはありますか
- ・どの位の広さですか

- ・基地かできる前は、何だったのですか
- ・日本で何番目位に大きいですか
- ・どんなことを主にやってるんですか
- ・基地ではどんな飛行機を扱っているのですか。何台位あるのですか
- ・基地から飛行機が飛ぶ時間はわかるのですか
- ・米軍の住宅はごく普通の家が並んでいるだけですか。商店街とかあるんですか
- ・屋良小学校にどんなめいわくをかけているのですか
- ・武器がありますが、事故になったらどうなるのですか
- ・騒音や墜落以外にめいわくなことはありませんか
- ・こんなにいっぱい嘉手納町をのっとられて、市民の意見は聞かなかったのですか
- ・基地があることで、何か住民にいいことはあるのですか
- ・墜落するという恐怖があるのにやめてくれないなんて、いったいどうすれば、やめてくれるのでしょうか
- ・軍隊をやめる人はいるのですか
- ・

沖縄の基地について知りたいこと

- ・基地のことを沖縄の小学校でも調べているのですか
- ・沖縄のどの位の土地が基地の土地なのですか
- ・沖縄で一番広い米軍基地はどこですか
- ・基地の中に入ったら、どうなるのですか
- ・基地は何個ありますか。かさそうろは何個位ありますか
- ・沖縄の基地では、1日に何機の飛行機が飛んでいるのですか
- ・飛行機が落ちたり、人が死んだりしましたか
- ・沖縄にはどうして基地がまとまってあるのですか
- ・基地は、沖縄の人にとっていやな存在なんですよ
- ・基地は沖縄の人にとって役にたっているのですか
- ・基地があって沖縄が得をしたことがあるのですか
- ・基地は何のためにあるのですか
- ・基地の近くを通るときはどう思っていますか
- ・どんな事を基地の人に言いたいですか

米軍基地はすごく大きいんだなーと しみじみ思った

学習旅行で実際に見学するカデナ基地。山本先生の話聞くこともできたので、その広さと町の状況をイメージできる授業をしようと考えた。算数の単位あたり量ので、カデナ基地と嘉手納町の人工密度を調べる授業を組んだ。まず地図で嘉手納町をマークし、次にカデナ基地をその中にマーキングすると、その占有率が見えてくる。町の82%をしめているのだから、町のほとんどが基地にとられている事が分かる。しかし、これだけではその広さを実感することはできない。鶴小・町田周辺の地図をOHPシートに焼く。同縮尺のカデナ基地のアウトラインのOHPシートを重ねてみると、鶴小、鶴川駅・町田駅がすっぽりと基地の中に入ってしまうのだ。その大き

さは驚異的なのが分かる。

次に嘉手納町がいかに基地に取られているかを人口密度でも見てみることにした。嘉手納町は基地がなければ 937 人 / km² なのだが、基地があるために 5483 人 / km² という人口密度となっている。これは日本の平均の 17 倍である。基地の中は（実際には滑走路等もあるのでちょっと違うのだが）631 人 / km² となる。また、23 区の人口密度は嘉手納町以上ということで、いかに東京がこんでいるかも紹介した。最後に日本平均を 1 として、嘉手納町の人口密度をシールで埋めていった。

また、日本人 4 人家族の平均的住宅と、米軍住宅の間取りを示して比較してみた。なんと日本人住宅は、米軍住宅の居間の中にすっぽりと入ってしまうのだ。そして、「思いやり予算」によって、光熱費を始めほとんどの費用が日本側持ちで、米兵 1 人あたり 1400 万程度のお金がかかっている事も話した。子どもたちには、こちらのインパクトのほうが大きかったようだ。その後横須賀基地に思いやり予算で巨大なレクリエーションセンターや横田基地に建設中の巨大ストアーなどの記事も取り上げていった。

沖縄の人は、基地のせいできゅうぎゅうづめでくらさなきゃいけないなんて.....あと米軍の人が住む家、にくい広すぎる。それにおふるが 2 つあるなんて、なんでひつようなの！来客用もあるなんて！でもそれだけならひとの勝手だからいいけど、それをたてたのは私たちの税金なんて信じられない！ムカツク！あーいらいらする！（仁美）

おきなわのきちってひろいねえ。もし鶴川にできたら、まちだくらいまでだめだから、すごいほしいんだね。おきなわもたいへんだね。（隆）

基地の広さと町の広さをくらべてとてもびっくりした。とてもびっくりした。町の人たちはすごいきつそうだなと思った。それにその米軍の人の家も日本の税金なんておかしい一度でいいからあんな大きな家に住みたい。（久爾）

あらためて、こんなに基地がひろいと思った。しかも、なんで米軍のすむところまで日本がはらわなきゃいけないんと思った。（達也）

ものすごい基地の広さだ。信じられない。でも広い家ってアメリカではふつうなのかな。それでも日本っていう国で、アメリカ人が日本人よりぜいたくな家にすむなんておかしい。お金も日本がはらうなんて、完全にアメリカ人が得してる。それを認めている日本も変だ。ただでさえ、せ

まい日本をこれ以上せまくすんなって感じ。（菜の葉）

上瀬谷基地見学に向けて 反戦地主と神奈川の基地を学ぶ

自習にしなければならぬ時間ができたので、ドキュメント人間劇場「反戦地主 池原秀明」というビデオを見せた。池原さんは、カデナ基地の中にあつた自分の土地を合法的に少しずつ取り戻し、基地内で農場を経営している。また、反戦地主会の事務局長を務め、米軍や日本政府と闘っている人だ。3 年前から世田谷小学校の学習旅行でお世話になっている。

3 年前、子どもたちは池原さんの行き様に感動した。子どもたちに送ってくれた言葉は、「夢

を実現するためには、手を取り合っていっしょに進んでいく仲間をふやしていくことです。」というものだった。

このビデオを見せたのは、沖縄には反戦地主といって、基地と闘っている人たちがいること、そして基地から土地を取り戻す事だってできるんだということ子どもたちにつかませたいという思いからだ。そして、上瀬谷基地の森さんの事につなげていきたいと考えていた。

森さんは、上瀬谷基地訴訟の原告だ。公立学校の用務員をしている。自分の所有地が不法占拠されている地主は他にも大勢いる。土地を返してもらいたいと思っていたり、森さんの行動に共感する人もいるのだが、日米両政府相手の裁判ということや、親類との関係などもあり、他の誰1人として原告になってくれる人はいないというのが現状らしい。そんな中で勇気を持って一人立ち上がった人だ。

森さんはテレビ放映の中で、「通信基地の機能を果たしていないことも分かったし、いつまでも国の思うままにされていたのでは、地域の発展にもならないと思う。」と語っている。「上瀬谷未来・一万人アンケート」では、即時全面返還・休遊地返還を会わせると93%の人が基地返還を希望している。また、ここに建設されようとしている米軍住宅には、79%の人が反対しているという現状だ。子どもたちに対しては、「話を聞いてくれるだけで本当にありがたい。みんなのことをたのしく思っている。何十年かかるか分からない闘いだけど、みんなも大きくなったら応援してくださいと語ってくれた。

そういうことを考えると、今後も学習をしていきたいと思うテーマだと感じている。

神奈川の基地については、地図と写真を使ってどこにどんな基地があるかをつかませた。基地という概念を広げるというのも一つのねらいだ。子ども達はミルク工場まで含めて基地ということには驚いていた。また、危険は空だけでなく自分たちの生活地域にあることも話していった。鶴見給油所から横田基地まで、民間の鉄道を使って危険なジェット燃料が運ばれている事や、相模原補給廠に民間のトラック輸送で弾薬や砲弾が国道16号を使って運び込まれている事を紹介した。知らないだけで、自分たちの生活が基地と深く関わっているということも知らせたいと考えたからだ。これは鶴小の空とまったく同じだ。

合わせて取り組んだのは、神奈川県東部の2万5千分の1の地図を張り合わせ、基地をマーキングしたものだ。そこにそれぞれの基地の写真を貼り付けていった。この地図を作ったのは、基地の位置と数などをつかませるといってもいいかもしれない。

子どもたちに自分の家をマーキングさせることで、自分の家と基地との位置関係や関わりをつかませられると考えたことがひとつだ。「近くに基地みたいなものがある」という子はけっこういるが、それが何という基地かなどは意外にわかっていない。また、過去の墜落事故の現場と自分たちの住んでいる場所の位置関係も分かる。

もうひとつは、自分の家で飛行機がうるさいと思う子どもには、さらに別のマーキングを入れさせた。横田・厚木両基地の飛行ルートと学校の関係が、それによって浮かび上がってくるのではないかと考えたからだ。学年全員のマークをいれたが、もっと多くの人に関わってもらおうと、よりはっきりとした結果が出てくるように思う。やはり、厚木基地から学校を結ぶ線上には子どもたちのマーキングが集まっていた。原町田の墜落事故現場付近に住んでいる子どももいた。

この地図を作っている時に、下鳥先生が5歳の時に、原町田の墜落事故を目撃していたことが分かった。また、中学校は米軍機の飛行ルート上にあり、補助がでて窓は二重サッシだったということにも驚いた。まるで沖縄のような話だ。厚木の滑走路、中学校、鶴小は見事に一直線で結ばれることが地図上で分かった。この話を聞いて下鳥先生の特別授業を計画した。当初、緑区の墜落事故を扱った後、学習旅行前のまとめの学習として扱う計画だったが、秋まつり等もあり、

旅行後という形になった。後に1組の土支田さんが高校生の時に緑区の墜落を目撃していたことや2組の綾部さんが原町田の墜落事故現場に行ったということが分かった。意外にも、身近に米軍機墜落を語れる人がいることに気づいた。掘り起こせば、生の経験を聞ける人が結構いるように思う。いわば証言者である。さらなる開拓をしてみたいと思った。

とにかく広い！

体を通して感じた上瀬谷通信基地

上瀬谷通信基地は、第7艦隊の船や航空機などからの情報や通信を受けたり、P3Cオライオン対潜哨戒機などから寄せられる他国の潜水艦や戦艦の情報や、他国の船の無線をキャッチし、米軍の司令部や戦艦に情報を送る役目をしてきた。いわば、第7艦隊の耳である。しかし、この施設も冷戦の終わりとともに3種11基のアンテナが撤去され、94年には方向探知用のループアンテナも撤去、95年には最後まで残っていた2本のアンテナも撤去され、事実上の役割を終えている。

上瀬谷基地内に自分の土地を持っている地主は220人いる。現在は土地を返してもらえない法的根拠はなく、不法占拠状態となっている。森さんの弁護団の調査によると、220人のうち3割に聞き取りをして、その過半数の人が返還を希望していることが分かっている。土地の広さは横浜スタジアム92個がすっぽり入ってしまうという242ヘクタールだ。そのうち4割は民有地・残り4割が国有地、2割が横浜市の市有地となっている。

本土の他の基地と違い、地主がいるのは沖縄の基地状況と似ている。また、土地返還の闘いをしているというところでも、沖縄と共通しているのが、今回見学をした一つの理由だ。基地の用・不要という議論はある意味難しい側面を持っている。個人の持ち物が基地のために返してもらえない。勝手に取りあげられている。それも不要なのにだ。子どもたちにとっては実に分かりやすい問題だと思う。「人に借りた物は、キッチンとその人に返す」こんな当たり前の事を国はやろうとしない。沖縄の基地も同じだ。勝手に持ち物を取り上げられ、返してもらえない。それは日本のためだからしかたないという。すべて、日本のためにという言葉で沖縄に押し付けている。この基地後に米軍住宅の建築計画があることが95年に明らかになった。他にレクリエーション施設や倉庫の建設がうたわれているらしい。つまり、横須賀や厚木基地の米軍住宅は騒音や環境が悪いということで、交通の便がいいこの場所に、代替りの住宅を建てようという腹積もりらしいのだ。基地としての機能は既に終えているのに、日米両政府がこの民有地を返還したがるのは、そういった理由があるかららしい。そこで1人立ち上がったが森さんというわけである。

もう一つこの基地見学を選んだ理由は、基地の中に実際入れるということだ。つまり、フェンスがないということなのだ。基地の中を歩いている海軍道路は、一般車も利用している普通の道路になっている。基地の敷地内の芝生広場で遊ぶ事もできる。外からその広さを眺めるだけでなく、自分の体を使ってその広さを実感できる場所がいい。距離的にも近く、気軽に実施できるのもいい。本当は、その後厚木が横田のどちらかの基地、願わくば両方に行きたいと考えていた。実際は時間的に無理があったことと、横田基地は見学スポットがなくなってしまった(ドライブイン)事で、見学計画を大幅に変更しなければならない状況がでてきたことでこれ一本になってしまった。しかし、鶴小の上空のことを考えると、どちらかには足を運びたい。

見学のスポットは3ヶ所になる。まず、正面ゲート。ここはいかにも基地という雰囲気がある。最初、中まで見学させてくれそうに交渉を続けたが、日本テレビのカメラが同行しているのを見

たとたん、拒否されてしまった。2ヶ月前に訴訟のことが放映されたので、カメラは入らないという条件であっても受け入れてもらえなかった。その後、世田谷の小学校にも紹介した。竹田先生実践にいったということだが、和光という名前を告げると中の見学はすぐに断られたということだった。

次のスポットは、県営細谷戸住宅の非常階段を借りて、基地の全貌を見るところだ。住宅の前は道路をはさんですぐ畑、そこはもう基地の敷地である。見える範囲はすべて基地。広いという驚きの声が上がっていた。遠く正面ゲートのあたりが見える

最後のスポットは、緑地だ。弁当はここで食べる。大きな公園のグラウンド以上の広さがあり、遠くヘリポートがある。休日は市民の憩いの場になっている。遊んだり、走り回ったりしながら、体でその広さを実感できる。空には、厚木基地に離発着する米軍機も見える。子どもたちは大喜びであった。

見学としてはソフトで見る場所も少ないので、基地を見学しに行ったという雰囲気ではなかった。また、森さんも成田さんも子ども相手に話すのは初めてで、実践の時よりも話が弾まなかった。強いインパクトが残らないということもあった。しかし、学校に帰ってきてあらためて自分たちが見学してきた場所、森さん・成田さんの話、上瀬谷の現状のビデオを見たら、子どもたちの目は真剣になった。見学してきた事がもう一度整理され、まとめに向かえたように思う。

畑がいっぱいあり、どこからどこが基地なのか分からなくなりそう。特に印象に残ったのは広い!!とにかく広い!成田さん、森さんに聞いて、自分の土地を自由に使えないなんて国が法律違反してどうすんだ!早く上瀬谷基地なんてなくなれ! (遼)

道のまわりが畑でその畑も基地の中なんて思えない広さだとおもう。成田さんと森さんの言うとおり、基地はもうなくなってもおかしくないのに、まだ基地がなくならないみたいだからいやだなあと思った。(光生)

桜並木の両側が基地というふうに見えなかった。基地でのお祭りに小さい頃いったことがある。近くにいとこが住んでいるから上瀬谷はくわしいけど、両端が基地だとは知らなかった。日本にアメリカがある。しかも基地があるなんて、おかしいな、と思った。近くにいとこも住んでいるし、とっても関係あることだと思った。(斐沙子)

前までは、沖縄の方が基地が多いんだから、神奈川県基地なんかは沖縄に比べたらなんでもないと思っていたが、それはあまい考えだったと思う。だって地元の人たちは同じように苦しんでいるし、悲しんでいる。なにも違わない。でも、やっぱり基地は土地と比べて多い。現場へ行ってみたことで、沖縄の人がとんなにつらいかが分かった。でもねやっぱり森さんと成田さんはすごいと思う。頭で分かっているけど、行動するのは難しいから.....。(裕美)

上瀬谷基地が広いといっても、カテナ基地と比べればこの程度だというのも子どもたちに示しておいた。(上図)

なぜ土地が返ってこないのだろう

緑区のファントム機の墜落事故も授業で扱いたいと思っていたところ、州平の家がなんとか「パパママバイバイ」の16ミリビデオを見つけてきてくれた。学年でフィルムを観ることにした。

子どもたちの中で話題になったのは、どうしてパイロットはパラシュートで脱出して、怪我もしていないのに、真っ先にヘリコプターが来て、つれていってしまうのかという事だった。怪我人はそのままにして、日本人は差別されているのではないかという声もあった。下鳥先生の話も聞いても同じなのだが、米兵は先に脱出し真っ先に救助されて姿を消してしまう。

また、出発直前に沖縄でふたつの事件があった。ひとつは高校生の上間さんひき逃げ事件だ。2組では、出発前に授業で取り上げた。1組では旅行1日目のバスの中で話をした。もう一つは島袋善祐さんら反戦地主7人が特措法を違憲として政府に訴えを起こした事だ。特措法は難しい問題だが、上瀬谷との関係もので、憲法29条の財産権と結びつけて子どもたちと考えてみた。

沖縄の土地収用委員会の様子がビデオにあったので、(ドキュメント98)それを見ながらどのようにして、個人の土地が意思に反して基地として使われていくのかを整理した。

沖縄では、この収用委員会で土地の強制収用が審議されている時に、国会は十分な審議も無しに特措法をぶち上げ、収用委員会の権限を骨抜きにした。その様子もビデオに出てくる。

例えば、児童会であるきまりを作ろうと話し合いを続けていたとする。その途中で、学校からすると都合の悪い事が起きそうなきまりだから、児童会が本来持っていた話し合う権利を定めている校則を学校が決めて、根本からひっくり返したということだ。と説明すると、「何それ!」「ひどいじゃん!」「それは頭に来るよ」と1組らしい反応が返ってきた。

この特措法が、憲法に違反するかどうか争われるんだよと、財産権についてを「私の憲法手帳」から引用した。「先生はどう思うの」と聞かれた。個人的には、おかしいと思うと答えた。まさに「公共性」の乱用だと思う。民主的な手続きがまったく無視される法律だと思う。

沖縄の基地はスケールが違う

音も広さも比べ物にならないね

カデナ基地は広くてF-15イーグルとかがいっぱい飛んでいて、屋良小学校はあんなにうるさい103デシベルなんてすごーなーというのか、わからなかった。とにかくカデナ基地はひろくてでかい!ぼくたちはいつもじゃないから「かっこいい」とか言ってられるけど、いつも味わっている人はいらいらとかストレスとかがたまったりしないのかなー。ずっといるとやっぱりうるさいなーと思った。(輝聖)

今日は安保の見える丘に行った。どれくらい広いのかさかいは見えないし、あっちもこっちも基地なのでよく分からなかった。(遼子)

今日安保の見える丘にいった一番初めに思ったことは、広くて広くてたまらないという事だ。どうしてあんなに広い土地が必要なんだろう。アメリカの人の住宅を建てる必要はないと思う。軍の人はいいけど家族の家はアメリカでいいと思う。それになぜ家が広いんだ。日本はせまいのにアメリカはずっと得ばかりしている。日本の税金で生活しているし。F-15はかっこよかった。一番印象に残っているのは広いということだ。(晶)

カデナ基地に行って初めて受けた印象は、やっぱりだだっ広い。ビデオとかのイメージとはやっぱり違った。うるささだって、鶴川で聞こえる音とはだいぶ違った。(杏子)

安保の見える丘から見た風景は、みわたすかぎり、かっそうろが続いていた。すごい大きな音

で、振動がすごかった。音が鶴小よりはるかに大きかった。それに低かった。沖縄は、こんな毎日なんだ。ほんとうに、こんなにうるさい基地なんて必要なのかなあ？基地やめて、電車つくればいいのにな.....。 （斐沙子）

基地で飛行機のうるさを聞いてみたら、東京とはけたちがいのうるささで、話も聞こえないくらいうるさかった。 （達也）

カデナの広さは子どもたちにとってけた違いだったようだ。上瀬谷基地が広いといっても、その終わりはまだ見えた。しかし、カデナ基地は終わりがまったく見えない。そして、行くところ所にフェンスと基地が続いている。

安保の見える丘では、騒音測定機を持っていったが、子どもたちはしきりに何デシベルかを気にしていた。学習してきた屋良小学校の100デシベル以上の爆音とはどんなものなのか、最高値は105デシベルだった。子どもたちからは、「すげー」と声が上がった。基地へ行く途中に、上間さんがひき逃げされたライカム交差点を通った。子どもたちに説明しながら、帰りのバスの中でこの事故の話と、日米地位協定の話をした。子どもたちが驚いたのは、飛行機や車が事故を起こしても、公務中であれば賠償金その他は日本持ちだということだ。年間7億円近くになる。

学習旅行中に晶が部屋に飛びこんできた。また、ひき逃げ事故があったとニュースでやっていたというのだ。今度は電話がかかってきて、テレビをつけろと知らせてきた。次の日に新聞を買うと、1面に載っていた。事故現場はホテルのすぐ近くであった。子どもたちの中でもその事は広まっていて、話題になっていた。学年集会では、旅行委員に新聞与え、それが一つの討論ポイントになった。

集会の中で、新聞の記事を紹介し、子どもたちの討論が始まった。先日もひき逃げ事故があったばかりなのに、また飲酒で事故なんて反省がないと怒りの声が続いた。その中で問題になったのは、日米地位協定だった。それがまちがっているのではないかという発言が続いた。

- ・アメリカに便利な法律だ。基地から出たら日本の事を考えてほしい。
- ・基地側は出入り自由なのに、日本人は入れない。アメリカに都合がよすぎる
- ・法律は公平にするためにあるのではないか。悪用するものではない。
- ・日本人・住民が困るような事をされては困る。

子どもたちは、今の日本、とりわけ基地に関わる矛盾や問題点を鋭く突いていた。この問題は「基地は何のためにあるのか」「軍隊とは何なのか」という問いを、その内側に含んでいる問題だと思う。そして、沖縄戦での軍隊が住民を守らなかったという事につながっていく問題のように感じている。

「私は大川先生が言ったように兵隊って何だろうと思いました。まちがったことを教えて、自分の事しか考えてなくて.....住民を守るなんてうそ、でたらめだ。住民を守るどころか殺して、「天皇陛下のため、お国のため」なんて.....。宮良ルリ先生の話のように、命を大切にする真実の教育を、これからも今も知っていきたいと思う。」 （梓）

目撃者がひとりもない奇妙な事故なんて、
不思議かつおそろしい 順子

学習旅行後、下鳥先生の特別授業が実現した。図書館で原町田の墜落事故を調べたときに強く印象に残ったのは、墜落してくるのを、ごった返していた商店街の人々がだれも見えていないという現実だった。耳をつんざく音にも慣れっこになっていて、気にするものがないかった

ということだった。実に恐ろしいことだと思う。こんな異常なことが、当たり前になってしまふ。感覚が麻痺してしまう。それではいけないと思う。子どもたちには、頭の片隅にでも気に留めて、うるさい、おかしいと思える感覚を持ちつづけてほしいと思った。

もうひとつの問題意識としては、軍隊は住民を守るのかということだった。米軍は本当に日本を守るためにここにいて訓練しているのかという問題だ。その答えを象徴しているのが墜落事故2件に共通するパラシュートと救助ヘリコプターのような気がするのだ。最後の授業では、そんなところを子どもたちに感じさせたいと思っていた。

この授業でポイントになったのは、下鳥先生がわざわざ作ってくれた再現ビデオだった。当時たどったコースを解説付きで編集していて臨場感が伝わってきた。

まず、当時の記事を読み、どんな事件だったのかを紹介し、2組の綾部さんに当時の体験を話してもらった。5分程度で、今でも鼻についている匂いの事を中心に話してくれた。(それは多分ジェット燃料ではないかと思う)その後、下鳥先生のビデオを観ながら、解説をしてもらい、さらに話をしてもらった。

ぽっかり不気味な大穴

つい落現場には、家一軒がすっぽりはまるような大穴が不気味に口をあけていた。ジェット燃料が別び散って、あちらこちらで燃え上がり、黒いけむりが一帯をつつむ。ペしゃんこの家、穴のあいた屋根。道路にはちぎれた電線、へし折れた電柱、カワラの破片がいっぱい。どろまみれになったふとん、ふみつぶされた家財道具が散らばっている。

火花をあげる電線、ひっきりなしにくずれ落ちる材木。事故を知ってかけつけた家族たちは「お父さんはどこ」「お姉さんが買い物をしていたはずです」と泣きながら走り回っていた。

つい落の瞬間を目撃した国鉄原町岡改札掛、相原金光さん(43)は「つい落現場は駅ホームの目と鼻の先で、最初キーンという耳のいたくなるような煤音がした。音がパッと止まった瞬間、目の前から黒いけむりが吹き上がった。そして1000メートルほどの上空に乗員のパラシュートのようが見えた。家がメチャメチャにこわれ、その下から血だらけになった4,5人の人がはいだしてきた。」と語った。

一瞬にして妻と長男を失い全身だぼくで伊藤病院にしゅうようされた吉田食肉店の主人、吉田治さん(30)は「奥の六畳間で妻と一緒にテレビを見ていたところ、ドーンという音とともに真っ暗になった。気がついた時はうつぶせになったまま口のなかまで土がはいり、背中に柱やハリがかさなり、土にうめられていた。右手が動いたので、土をかき死に物狂いで妻の名を呼んだ。しかし、返事はなかった」と暗然とする。

吉田食肉店の前の小山建具店店員小山将弘さん(31)の話によると、爆発音がした直後中年の通行人がふき飛ばされ、近くの屋根にひっかかっていたという。

不安が現実に厚木基地へのコース

町田市はりん接の神奈川県厚木市米軍厚木基地の北西約12キロ。同基地への着陸コースにあたる。昨年末にも大和市内にジェット機がつい落、民家4むねが焼けるという事故があったばかり。町の人々は「いつか事故が起こる」と語っていたが、不幸にも的中した。

学習旅行のように、こちらが思っているような討論にはならなかった。が、子どもたちはぼつりぼつりと質問を出し始めて、いろいろな事を聞いていた。パラシュートの数がいくつだったとか、ヘリコプターはいつ来たのかなどだ。下鳥先生の話だと、パラシュートが小学校の校

庭に降り立つと同時くらいに、すぐにヘリコプターが飛んできたという。先生は、子ども頃墜落すると思っていたかというような質問もでいた。

後半では、パネルに貼った地図をみながら、厚木基地の位置と、墜落現場・下鳥先生が話してくれた二重窓の中学校、鶴小の位置を確かめ（ほぼ一直線となる）、自分の家やうるさいと感じる家のマーキングを見てみた。そして、町田市上空の米軍機航空図と米軍機墜落事故の記事を卒業生の一冊本からということで紹介をした。

訓練中の米軍機は、毎年50機以上墜落しているらしい。以前に比べれば劇的に減っているらしいが、平均週一回以上の割合で墜落事故があることを米軍首脳も認めている。

米軍機の墜落事故はたくさんある。横浜市の墜落事故にしても、ヘリコプターが助けに来るのは同じである。また、すりきずくらいの米軍兵は助かるが、今にも死んでしまいそうな人たちを無視するのはおかしい。米軍兵を助ける前に住民の人たちを助けなければならないと思う。住宅密集地に飛行機が飛んでいるのはとてもあぶないと思う。（久爾）

こんな話を聞いたら、いっどこでおきるかわからないしすごい不安だ。飛行機事故で何人も人がなくなったりけがしたりしてるし、飛行機がうるさいのも問題だ。米軍、そのところをちゃんとやってくれないとすごいこまるっていうか、飛行機とぶな基地作るなってかんじだよ。（芽里）

なんでつらいくした飛行機のパイロットを最初にたすけるんだ？なんか救助する順番が間違っている。いつか鶴川にも……………ガガン（美穂）

「パパママバイバイ」の話と同じように、救助隊は米軍だけをたすけて、住民はたすけないなんてひどい。今日話を聞いて、このごろ家のまわりを飛びまくっているヘリコプターが落ちそうで怖くなった。（州平）

2組の、のりこが言っていたように、天皇の馬小屋は火を消し止めたと言われて「ひどい！当時はこんな事が……………？」（社会 東京大空襲の授業で）と思っていたのに、今は今で、天皇が、米軍で同じ様な事が起こっているなんて！当時のことだけなんて言ってらんないよ。ほんと、こわい。鶴小もこの話を聞いてもっと落ちる確率が多いとあらためて考えた。（直）

下鳥先生や2組の人のお母さんにはなしてもらって思ったのは、無傷でたすかった米軍の人はヘリですぐつれていったのに、くるしんでいる住民への対応はそれに比べて遅かったとう事だ。`人命軽視`だと思った。私の母も緑区のつい落事件を見たけど、その時も中に乗っていた米軍の人は、無傷で鉄小学校に降りた。もう少し長く乗って操縦していれば、住民のいる所に落ちなかったかもしれなかったと聞いて、無責任だと思った。くだらないそうじゅう訓練で何人もの人が命をおとってしまうなんて、本当に悲しい事だと思う。（綾子）

下鳥先生が小さい頃から騒音があったから飛行機は事故るものだと思っていたっていうのには納得した。さっきも言ったけど、最後の最後まで原因とかつきとめて報告したりしないで、全く何のために基地があって飛行機が飛んでんだかよく考えて事故れよ！……………（杏子）

いつ飛行機が落ちてくるのか分からないというのが、こわいと思った。鶴小の上も大丈夫って思ってたけど、落ちる可能性が大きいというのは、この事件を知って始めて分かった。

あと、事故のあった飛行機からパラシュートで降りてきた米軍がけがのあった住民。何の関係もない住民をほうっておくなんてひどいと思った。

沖縄に行った時の、米軍のひき逃げみたい。飛行機おいたままどっかいつちゃうなんて、日本に勝って安全保障条約してるからっていばってんじゃね！アメリカのいいほうばっか法律きめんなこのやろ！沖縄の知事？「本土となかよく」なんて言ってんじゃねー。沖縄の人も「けいざい」にうごかされんなよ！アメリカに負けるな！沖縄も私たちの町もまもんなきゃ！

(梓)

今回の基地学習で、一番変わったのは、子どもたちが意識して飛行機を見上げるようになった事だ。日常的に墜落の心配をして、危機意識を持つというのは、我々大人であってもないことであり、大きく自分たちの日常生活が変わったわけではない。しかし、子どもたちに一つの問題意識を持たせることはできたと思う。2学期の終わりにイラクの空爆があった時、子どもたちは米軍機の飛来が多いことと結びつけて、その現象を捉えていた。夜間離発着訓練が始まるという話題や、「昨日、ヘリコプターが12機編隊で飛んでいるのを見た？」などと言う話題や会話が日常的に交わされたり、子どもたちから教師に話題が提供される事も多くなった。空を見上げる子どもたちになったと思う。

原町田の墜落を扱ったことで、米軍機の事故が子どもたちに身近になった。直接体験した人の話というものが、子どもたちに対して説得力を持ったように思う。鶴小もその延長線上にある、自分たちの家もその延長線上にあるんだという事が加わり、基地の問題が少し自分たちに近い存在になったと思う。しかし、もう一步具体的な活動や行動といったものまで進めないのかというのは課題となるように思う。まだ、本当にまとめられたという実感が無い。

カテナ基地を見学してみて、子どもたちは鶴小での騒音、上瀬谷基地の広さが比較の基準になって、沖縄の基地や被害のスケールを感じ取っていたように思う。「やっぱり沖縄は違う」「沖縄の痛みは大きい」という思いがより鮮明になった。しかし、基地の騒音は東京だから小さいのではなく、鶴小だから小さいのである。横田や厚木といった本土の基地でも、その周辺ではもっとすごいのだと言う事は体験させたい。本土のカテナ的な基地も見たい。そうすれば、もう少し自分たちの地域でも、沖縄と同じ様な状況があるのだという事が感じられたように思う。

また、沖縄で基地と闘っている反戦地主の人とも出会えたらなおいれと欲を持っている。上瀬谷がもっと浮かび上がってくるかも知れない。もう一步、沖縄の基地と神奈川の基地(は違う)という意識を埋めたいと思う。まだ、自分たちの地域に戻ってききれていないと感じる。そういう意味では、まだ自分たちの地域から沖縄を見る(自分たちの地域と沖縄をつなげて見る)という角度は不十分であったという印象が否めない。

今回2つの墜落事故を扱う中で、それが学習旅行でのひき逃げ事件や地位協定の問題などとも重なり、結局日本人や市民が大切にされていない、米軍が最優先されているという現実が子どもたちのなかで鮮明になった。結局基地は何のためにあるのか、日本を守る安保とはいったい何なのか、という問いかけが子どもたちの中に生まれていったように思う。

騒音・基地の広さなどは事前学習の中で丁寧に取り組んだこともあり、短い時間の見学だったか、子どもたちが見たい、体験したい事は鮮明になっていったように思う。

基地は子どもから遠い、しかし、鶴小ではこの問題に切りこんでいくのに十分な地理的条件があると思った。さらなる発展と検証が必要だと思う。

教育の力はおそろしい

子どもたちが作り出した今年のテーマ

今回1組の中で、皇民化教育についてこだわり、学級の論議の火付け役になったのは、菜の葉だった。チビチリガマとシムクガマの授業の中で、そして1組の「出発にあたって」にかかわって、その中心的役割を果たしていたと思っている。

子どもたちが今回の沖縄学習で共通の土台としてつかんだものは、皇民化教育だった。学習旅行で金城先生の証言を聞く機会があったというのも、一つの大きな要因だが、それにはいくつかの伏線があったように感じている。そのひとつは「命の授業」であり、もうひとつは教科の授業であったように思っている。ここでは、実践の経過とともに、教科教育との関連性について報告したいと思う。

朝鮮人差別を扱って 北風は芽を

子どもたちと皇民化教育との出会いは、1学期の国語「北風は芽を」だった。当時の時代背景と、日本と朝鮮の関係や朝鮮人がどのような目にあっていたのかななどを、読み取りの授業の前に扱った。

「創氏改名」朝鮮を支配した日本は、朝鮮の人達に自分の名前を使うことさえ許さなかった。無理やり日本人の名前をつけさせた。創氏改名相談所に並んでいる朝鮮の人達の写真を見せた。

小学校の授業の風景。国語の風景だ。黒板には「天皇陛下は、……」などと板書がある。子どもたちは日本の学校だと思うが、実は朝鮮に作られた学校、日本人教師が日本語を教えている。これが皇民化教育。自分の国の歴史も言葉も一切学ばせない。このような写真を見せながら、当時の日本の様子を1時間かけて見せていった。初めの炭坑での労働が書かれている部分では

、「人間を（朝鮮人を）使い捨てカメラのように扱う」「人としてでなく、物として扱っている」と子どもたちは表現していた。また、日本人はどうしてこんな事をするのかという疑問と、情けなさのようなものを子どもたちは感じ取っていた。そして、（最初の感想で）

「アンを助けてくれた正作さんは、日本人なのにけいけいもせず、受け入れてくれるなんてすごい事だと思った。初めて心から愛してくれる人にあえてアンは幸せになってよかった。」（順子）

「国が違うということで人間扱いされなかったけど、ある人は人間扱いしてくれて、そうですね。だってその時は、かばう事は許されなかったのにね。とにかくすげー人」（さやか）

「戦争のときでも、こう親切にしてくれる日本人はいたんだ。……」（祐紀）

のように、正作という人間が特殊な人間として浮かび上がってくる。

また、この教材の中で、朝鮮人が受ける不当な扱いについて、子どもたちは疑問と怒りを覚える。アンを助ける正作一家を浮かび上がらせるためにも、当時の日本人が朝鮮人をどのように見、

扱っていたのかは幾度となく授業で補足していった。特に、順子がいるのであいまいに扱えない教材でもあったので、国語をやりながらも、歴史の授業をやっているような授業も多かった。子どもたちにも、「なんか社会の授業をしているみたい」などと言われたこともあった。

この朝鮮人に対する不当な差別について、教室では時々話題にしていた。毎回この授業の時に触れるのだから、チマ・チョゴリを切り裂く事件についてだ。今年度は、北朝鮮のノドンミサイルの発射事件などもあり、朝鮮人学校や生徒へのいやがらせが相変わらず起こった。まったくはずかしいことである。子ども達もひどく頭にきていた。「今でも、朝鮮人や中国人に対する日本人の差別はある」そういう現実を、子どもたちとともに考えてきた。新聞記事を見つけると、子どもたちに紹介してきた。こういった、根っこには昔からの差別意識が相変わらずのこっているのだと思うし、弱いものに対する嫌がらせで、実に卑怯な抗議や主張だと思う。本当にはずかしい。

差別と人命軽視の考え方 15年戦争の中で

もうひとつは、2学期の社会科の授業で扱ってきた内容である。15年戦争の授業は次のように進めてきた。

6年2学期社会

15年戦争指導計画

単元のねらい

日本が中国で行ってきたことが分かり、それについて考えることができる
なぜ戦争が起きたのかが分かる
戦争を推し進めていく社会のしくみがわかる
当時の生活を自分の興味をもとに調べ、交流することができる。

指導計画 教材	授業のねらい	授業の内容	時数
満州事変	市民の反応を知る	マスコミは戦争支持 中国人差別 戦争は儲かる	1時間
満州事変が 起こったわけ	戦争へと進んでいった 理由を考える	軍部の宣伝 治安維持法改正	1時間
中国人を どうみていたか	日本人がアジアで行った 事実を知る	731部隊か 南京大虐殺	1時間
行きづまる 日中戦争	なぜ、太平洋戦争へと 進んでいったのかを考える	ノモンハン事件 A B C D包囲陣	1時間

太平洋戦争 始まる	当時の生活を知る 軍部の戦争の見通しを 考える	ラジオ番組 小学生の作文 日本の資源	1時間
レイテ沖海戦	事実を知らされない 国民	大本営発表と 実際の戦果	1時間
マレー沖海戦	人命軽視・攻撃優先の 日本軍の思想を知る	NHKビデオ	1時間
近衛上奏文	この後、どれだけの人が 戦争の犠牲になったのか を知る	特別授業の中で	
東京大空襲	空襲が激しくなった 理由を知る 国民はどう扱われた のかを考える	映像 新聞記事 大本営発表	1時間
松代大本営	強制労働について知る 沖縄戦との関連を考える	ビデオ	1時間
ヒロシマ ナガサキ	(国語「ヒロシマのうた」の導入で、原爆とその 被害について扱う 3つの威力を知る 原爆が落とされた理由を 考える	ビデオ等も使用)	1時間

40

子ども達の調べ活動について

本だけでなく、自分の祖父母などへの聞き取り調査(手紙等を使って)を基調にして取り組ませる。返事の戻りも考えて、時間の設定をする。基本的に授業時間ですべてを保証することはしない。沖縄学習旅行後、発表の時間をとる。それまでは、授業を進めることを優先する。課題提起は、早いうちにしておく。テーマ設定までは、2コマ程度の時間保証が必要かもしれない。

特に重点をおいたのは、中国・朝鮮人に対してどんな事をしたのか、そしてなぜそんなことができたのかというものだった。もうひとつは「人命軽視」の当時の考え方である。

満州事変で扱った、事件報道を聞いての神戸市民の反応「支那のやつらといたら、ひきょうなやつらだからね、やればいい、やっちまえばいいんです」「大いに懲(ようちょう)すべし」という反応、満州での残虐な行為について、天皇が「朕は毒草にも似た朝鮮人をよく刈り取っているとす」といった言葉。南京大虐殺を扱った時、当時の軍隊では、チャンコロ(中国人)の

首を切り落としたかと家族から手紙が来て、調理係の若い兵隊が、最前線に配属してほしいと上官に頼んだ話など、子どもたちが「なんで！」と思う事の背景には、朝鮮・中国に対する日本人の差別意識があった。

731部隊での人体実験。手をかちかちに凍らせて、砕く。ペスト菌を植え付けて治療せずに放置する。ここで使われる中国人のことを、マルタと呼んだ。人間として見ない扱いをよくここまでできると子どもたちは言う。なぜ、そんなことができるのか。差別意識を植え込まれていたからだという話になった。

太平洋戦争海戦当時のラジオ番組、朝から戦争に関するものばかり。それが普通の日常だった。小学生の作文を読むと、はやく兵隊になって、お国のため、天皇陛下のために戦いたいと決意が書かれている。信じられないという子どもたちは、やっぱり教えられてきたからだという結論になった。

マレー沖海戦では、ビデオを通してアメリカ軍の考え方と日本軍の考え方を学んだ。飛行性能を極限までに引き出そうと、徹底的に軽量化した日本の零戦。そのために燃料タンクが丸出しで、弾があただけですぐに火をふいてしまう。防弾カバー装着の声も、「そんな弱気なことでどうするのか」という声で消し飛んでしまう。そのために、日本は優秀なパイロットを次々に失い、最後には特攻隊を生み出す。アメリカは、パイロットを守るために徹底的な対策を講じる。飛行機一機にお金をかける方が、パイロットを育成することよりもずっと安いと、精神論の日本と違って合理主義を貫く。

レーダーに対して、防御の設備などいらない。攻撃あるのみという非科学的な日本軍と、最新技術を駆使して、新しい武器やレーダーを開発していくアメリカ。日本軍の精神主義と攻撃優先・人命軽視の考え方。それがより多くの犠牲者をだした。

NHKの番組では、その思想は、現代社会においても変わっていないのではないかと締めくくっている。企業優先・利益優先の社会の中で、生活・福祉などは切り捨て、過労死も増えている今の世の中にも同じ考え方がはびこっているのではないかと確かに感じる。

東京大空襲の授業では、その悲惨さとともに、当時の新聞報道を取り上げた。天皇の馬小屋の火は 時に鎮火、その他も明け方には鎮火した。その他とは、10万人の焼け死んだ大火事の事だ。10万の国民よりもただの馬小屋の方が大事に扱われている。それが天皇の物だからだ。10万人死んでも、戦力には何の影響も無いと報じられる。

また、今回の空襲は、国民が至らなかつたせいであるのに、そんな国民を天皇陛下は哀れに思ってくれている。ありがたく思い、気を引き締めなおせと社説に書かれている。それを見て子どもたちは、人の命をなんだと思っているのかとひどく怒っていた。

集団「自決」を考える

事前学習では、チビチリガマ・シムクガマを扱った。学習旅行で集団自決の証言を聞くので、その土壌を作るためだ。読谷、北谷あたりの風景や、チビチリガマ内部やシムクガマの入り口のビデオを見せた。また、チビチリガマの入り口が再び閉じられていることについて、知花カマドさんが話していることを聞いた。つらい思いをしてガマを開き、開放したが沖縄や日本はいっこうに変わらない。平和にならない。ガマの中に多くの人が入る。あそこは、肉親の墓も同じで、肉親を踏みつけられているようだがまんができない。という話だった。

そして、チビチリガマとシムクガマ（岩波ブックレット）の一部を読み聞かせした。

チビチリガマには、31所帯139人の人々がひそんでいた。そして、17世帯82人の人が集団「自決」をした。その半分は小学生以下の子どもたちだった。この洞窟のリーダーは中国戦線にくぐってきたこともある在郷軍人だったアメリカ軍の投降の説得には応じず、男は竹やりで切り込み、残った人々は衣服や布団に火を放ち、刃物で切り合って命を落とした。知花さんという看護婦さんがいて、この女性は男が打たれて絶叫する中、みんなを静め、教えの通り「自決」を自ら自分の家族に青酸カリの注射を打ち実行し、みんなにも呼びかけた。当時の日本国民の鏡である。

シムクガマには、約1000名の部落住民が避難していたが、洞窟の入り口にいた3名が艦砲の直撃を受けて即死した他は、全員が投降して助かったのである。この洞窟には、ハワイ帰りの2人の男がリーダーだった。英語も話せ、アメリカの事をよく知っている2人は住民を説得して、ガマから出ていったのである。比嘉さんというこのリーダーは、普段「非国民」として部落では冷たい仕打ちを受けていた人だ。

この話を聞いているとき、最近では米軍機が飛んでくるとベランダにすっ飛んで行く子どもたちが、かなり低空の飛行機が通過しても、声一つたてなかった。立てられない雰囲気は学級の中に漂っていた。1000人も命を救った比嘉さんが非国民（「北風は芽を」から始まり、歴史の中でも幾度も出で来た言葉である）で、知花さんが日本人の鏡だったという事にどうしても納得がいかないというのが子どもたちの反応だった。そして、自殺をするなんておかしいという声もでてきた。

「小学生以下の子ども、1.2年生位の子たちが自分で死ぬという事を決められるだろうか」という問いには、みんなが無理だと答えていた。そして、「チビチリガマとシムクガマの違いは、どうして起こったのか」という問いには、「チビチリガマには日本兵がいた」「シムクガマにはハワイ帰りの人がいた」ということが話されていった。その違いは、天皇と国のために敵を殺して自分も死ぬという教育が、徹底されていたというところにたどり着いた。そして、それを「皇民化教育」というのだと話した。

学習旅行では、これと同じ事を経験した人の話を聞くことになる。この授業から、子どもたちの学習旅行に対する構えが少し変わってきた。今までの授業などで、「何で！」ともややもやしていたものが、ここに来て一気に凝集されてきたように感じた。この後書いた、学んだこと・学んできた事作文から、「出発にあたって」が班長会で作られ、学級討議にかけられた。

言葉一つ一つや、その表現について意見が出され、3時間かかって作り直されていった。「集団自決」を学習して、という部分で、「天皇とお国のために死ぬなんて、捕虜になれば助かるかもし

44

れないのに、玉砕なんかしてばかだと思いました。」という一文が問題になった。教師もひっかかっていた部分だった。子どもたちの中で「そこまで書いたら失礼ではないか」「もう少し柔らかい言い方にしたほうがいい」という声もでていた。最後に直が「今、素直にそう思うのなら、このままでいいんじゃないか、向こうに行って話しを聞いてまた考えればいいと思う。」という発言にみんなも納得して、原文のままで残すことになった。

「自決」した人は、ばかなのか 金城先生の話聞いて

金城先生は、自分の重たい体験を、子どもたちに淡々と語ってくれた。その中で、当時の教育

について多くを語ってくれた。その内容を要約すると以上ようになる。

日本の軍国主義 まちがった教育思想

- ・鬼畜米英.....自分は16年間アメリカ・イギリスを憎むことを教えられた。一人でも多く殺す事。
アメリカ・イギリス人は、耳や鼻をそぐ・戦車でひき殺す・女性ははずかしめを受ける
オウム真理教のマインド・コントロールと同じ
教育は間違った事を教えられると大変なことになる
- ・長参謀長・日本軍 <一人十殺の精神でのぞめ> 軍隊といっしょに戦い、死ぬ事を強要した戦いである。
<生きて虜囚の辱めを受けず> 捕虜になることははじである。
自ら死ぬ事を選べ
- ・鬼畜米英を殺せ 戦場では憎しみが恐怖に変わった。集団「自決」が進むにつれて生き残ったらどうしようという気持ち。死に向かえば、生き残ろうとするのが自然。だが、生きていたら鬼畜米英に.....
その恐怖は想像を絶するものだった。

命が虫けらのように軽視された

- ・沖縄戦では、15歳以下の少年少女が1万人以上が犠牲になった
- ・琉球王朝の王は、琉球処分の際に、部下にこう言った「なげくな臣下、命どう宝」王朝時代のアジ（各地方の有力者）を集めて、武器を持たず集めて、生活を保障した。戦いはその後なくなった。
- ・沖縄の心 「イチャリバちよーでいー」 どんな外国人も大切にす

皇民化教育

- ・東京に向かって毎朝、天皇陛下に向かっておじぎをした。
- ・天皇・皇后の写真をおがみ、教育勅語を暗唱した。
- これが日本だったのか**
- ・集団「自決」を見てショックを受けたアメリカでは、「ニューヨークタイムス」に記事が載った。弔文も載った。
- ・日本の新聞では、一紙たりとも記事にしていなかった。700名の尊い命が失われたのに...・

金城先生の話は、子どもたちが今までずっと感じていた当時の日本・日本人に対する怒りやとまどいの感情に対して、一つの答えになっていったのだろう。そして、子どもたちには、この話を深く受け止める土壌ができていたのだと思う。新聞の話も、真実を知らされず、うその戦果と勝利を信じ込まされていた当時（戦争を推し進めるしくみ）を社会で学習してきた事と見事に結びついた。金城先生の話は、今まで学習してきた事の一つの答えになっていた。

1組の結論 学級集会での討論

1日目には重たいテーマだが、学級集会では集団「自決」に関するあの一文について話し合うことを提案した。その理由は、自分の個人的な思いであるが2つあった。

証言者の話を聞いて、それを「ばかだ」という簡単な一言で終わらせるわけにはいかない。集団「自決」の持っている本質的な問題を子どもたちと明らかにしたかった。金城先生の話は、今すぐに考えあうことを拒めない心打つものが自分には感じられた。沖縄の地で、クラスの子どもたちと突っ込んで討論出来る場はここしかない。学習旅行の中で、この子どもたちととことん何かを追及したかった。

子どもたちは一人一人が、この問題について語った。このことが、「皇民化教育」という子どもたち自身のテーマを決定的なものにしたと思っている。

あゆみ「チビチリガマの話が聞かされてばかだと思ったが、本人たちがばかだったのではなくて教育がばかだったんじゃないかと思った。」

拓海「教育はまちがったことを教えると、このような悲惨な事を起こしてしまう。教育が悪いと思った。」

達也「普通の生き延びるための教育を受けていれば、死なずにすんだと思う。」

麗子「死んだ人がばかだというより、そう教えた国のほうがばかだと思った。」

直「物事を考えるための基準のない怖さを感じた。」

祐紀「国が悪い。人の命を軽く見ている。」

光生「アメリカ軍につかまったら殺されると教えられていた。教え方がひどい。変な教育を強制的に教えられてひどい。」

菜の葉「ばかだと思う気持ちは変わらない。国民もばか、教え方もばか、教育が人の脳みそを左右するんだと思った。」

芽里「捕虜になることは恥ずかしいと教えられていた事を聞いて納得した。」

その日に自分が一番残したい事を書く200字メッセージでは、32人が金城先生の話についてを書いていた。いくつかを紹介しておきたい。

「戦争の時、おそろしさで号泣した事、皇民化教育の事、そして命の尊さ、大切さ、平和とは何か、...私は証言者さんの話ってインパクトがあって身にしみる。皇民化教育のせいで自分たちがばかげしているとさえきづかないなんて悲惨だ。今日一日で私の心は変わった。」(順子)

「私たちからいえば、ばかだけど当時では集団自決はふつう、常識？だったのかもしれない。もしそうだったらいやでも死ななきゃならない時代だったんだと思う。もし自分がその時代に生きていたとしたら渡しも、自決していたのかもしれない、と金城先生の話聞いていて、思えるようになった。」(美穂)

「.....天皇の教育はへんだから、その教育で何万人という人が亡くなっているから、人の命をゴミみたいにしないほしい。」(隆)

「金城先生の話聞いて教育はこわいと思った。今、私はこれが正しい、これが正しくないと判断しているけどもしかしたら先生たちにそういう考え方を植え付けられているのかもしれない。沖縄の人たちが素直に教育を受け止めたばかりにこんな結果になってしまったのはすごくざんこくだと思った。」(遼子)

二日目の宮良ルリ先生の話の中にも、教育の話が出てくる。生き残れと言いついて出陣していた先輩のことを「気が狂った」と思い、特攻機が真っ赤な炎に包まれて、軍艦に体当たりをするのを見て大喜びしていた。今そこで命を散らしていく人の事は考える事すらしなかった。「私は軍国少女だったのです。」

最終日の学年集会では、集団自決が2つ目の討論の柱になった。教育というものの力と、集「自決」は自決でなく、金城先生が言っていたように、皇民化教育によって引き起こされた集団「強制死」ではないかという事が語られた。

子どもたちが皇民化教育にこだわったのは、それが命を軽んじているものだからではないかと思う。命をごみのように扱うものだからなのだと思う。

「今日金城さんの話を聞いて、やっぱり集団自決ってひどいなと思った。どこがひどいのかというと、アメリカのほりよになれば死なずにすんだというの知らないで、そんなかんたんに死のうとしちゃうんだもん。それに、日本軍は、人の命をなんとも思っていないんだもん。そりゃ自分だって、アメリカ軍が着たらこわいけど、人の命をそまつにするのはよくないと思った。」(州平)

「集団自決はによってあったものだと思う。またふつうなら行きようとか思うものだけれど、皇民化教育によって生きることができないようになってしまっている。天皇やお国のために死ねという教育はおかしいと思う。また、人の命を大事にしないのはおかしいと思う。日本もアメリカのように人の命を大切にしてほしい。平和と命こそ一番大切だと思う。」(久爾)

「今日、金城さんの話をきいて、ぼくはこう思いました。さいしょはたずかるかもしれないのをわざわざことわるなんてばかだと思いました。けど、話を聞いていると天皇が変な教育をしたからなったものだと思います。けど、ぼくなりにはそういう教育をされたけどどうしてきがつかなかったのかな。あとは命の大切さをあまくみていて、てきとうにやったのがゆるせません。」

(祐策)

「私は金城先生の話聞いて、一番思ったことは、「命どう宝」ということです。というのは、今日話を聞いた集団自決の事です。私は今日の学級集会で私は、皇民化教育を考えた人が悪いと言いました。だけどその他に私は、命を大切にすることを考えました。だって、命をそまつにしてはいけません。命を無だにしているのとおなじ。だからこれからは平和という字が消えないように、また、沖縄の基地について深く考えなくてははいけません。」(桜子)

いつもがんばって生きていけば寿命な
んて限りなく延ばせるんだ (美穂)

死を通して命を考える授業は、次のように行った

<1 学期>

- | | | |
|----------------------|----|---------------|
| ・甲斐 裕美さんの特別授業 | 2h | 北村さんの話・童話を作ろう |
| ・童話「うるこ雲」の読み聞かせ..... | 1h | 甲斐さん作・北村さん挿絵 |
| ・北村 みやさんの特別授業..... | 2h | |

<2 学期>

取り立てての授業はしなかった

<3 学期>

- ・まあちゃんの絵を味わう.....1h 画集を見ながら
- ・まあちゃんの最後の絵.....1h 「スーホーの白い馬」

命の授業を総合学習「沖縄」の中で実践して 何が見えてきたのか

今回1年間を通して実践してみて感じていることは2つある。

1つ目は、子どもたちが何を感じているかだ。やはり、「死」というものは子どもたちにとって未だとらえきれないものだと思う。そして、自分が死んでしまうという実感はほとんどないだろう。クラスの中では、「死んでしまいたいと思った事がある」にはいと答えたのは、3人。理由は友達とのトラブルと親にしかられた時。実際に死のうと思ったという子はいなかった。

子どもたちが感じているのは、「死」を前にして、いかに「生きようとしたか」「生きたか」という姿に深い感動とその力強さを感じているのだと思う。

2つ目は、沖縄での学習や社会、国語での学習（皇民化教育・沖縄戦・集団自決・基地と地位協定など）で子どもたちが学んできた様々なことを貫く、一本のくしだったように思う。子どもたちがこれらの事を考え、出してきた結論に貫かれているのは「命」の問題だったと思う。その命の尊さを深く刻み込んだのが、この「死を通して命を考える授業」であったのではないかと思う。以下、実践の報告をしながら考えていきたい。

死というものを考える 甲斐さんの授業

授業は、甲斐さんの自己紹介から始まり、ホスピスという所がどういうところで、どんな事があるのかという事を話してくれた。そして、童話を作ろうという事で、次の四つの質問に自分が答えるという事で1人1人が考える。

残念だけど、あなたの病気を完全に治すのは、難しいかもしれないな（自分は何と答えるか）

ねえ、これから何かやりたいことはある？（自分は何と答えるか）

死んだらどうなるのかな？（自分は友達としてしを前にした患者に何というか）

ねえ、声をかけてあげて（最後を迎える友達に自分が声をかけるとしたら）

そして、甲斐さんが書いた童話の挿絵を頼んだ、ガン末期患者の北村さんの話をしてくれた。上のプリントの というのは、その話を聞いた後で改めて書きなおしたものだ。この はかけていない子どもたちが多い。死に直面してということは、子どもたちにとっては難しいのだろう。しかし、死を前にして書かれたその挿絵や粘土の作品と作られるまでの様子のお話は、子どもたちに驚きを与えた。また、ホスピスというものの存在や甲斐さんのようなボランティアの人たちの存在に子どもたちは新しい発見をしたようだった。最後は、自分が考える幸せな死というものを書いた。子どもたちによって様々でおもしろい。

甲斐さんへ

「私には`死ぬ`ってことがよく分からない。しかも、あといのちが30~40日しかない人の気持ちはもっとわかりませんでした。首から下が動かない患者さんは、甲斐さんのためにきつ

ねの絵をいっしょうけんめいかいてくれたんですね。そんなきせきがあるんですね。」(藍)

「先生はそういうところで働いているんだね。もし、私のがんにかかったらすぐそこへとんでいくよ。あと、本当に死ぬってどういう事なの？よく、テレビでみるけど新しい人に生きかえるの？それともずっと永遠に意識のないままになるの？でも、こういうこと聞いても、だれも知っているわけないよね。でも、おじいちゃんは一回生きかえたんだよ。広いお花畑に出たんだって、ふしぎだね。」(陽子)

「日本の中で3人に1人ががんで死んでしまうなんて、やっぱり楽に死にたいなど思うのだろう。死ぬ前にやりたい事なんて聞かされてもやっぱりそれよりも長生きしたい。いきなり死ぬなんていわれても……」 (祐紀)

「はるおさんの作品は、とてもきょうみがありました。中でも1000羽折る(北村さんではない)と言った人が、(折りきれずなくなってしまう)残念だった。もし、うちらのお母さんお父さんが「がん」にかかったら、どう思うかがなんとなくなりました。」 (祐斗)

「本当に死にそうな人でも笑うの？もうすぐ死ぬと分かっているながら前向きに生きていられるなんてすごい。ぼくがもしこんなふうになってしまったら前向きに生きたい。」(拓海)

「がんとかで苦しむ人はたくさんいる。みんな死んでいくこの人たちをなくさめる仕事はすばらしいことだ。みんなそれぞれ言いたい事、やりたい事をかなえてあげるのはすごくかんげきした。みんながんとかにかかる人は多いけれど、それに負けずにやっているのはすごい。千羽鶴を作ると言った人はできなかったけど、すごい事だと思った。」(和輝)

「今日の話聞いて驚きました。ホスピスっていう所も知りませんでした。でも、もし自分が「もうたすからない」っていわれたら、どうしようもなくなってしまうのに、みんな(他の人)は明るいな。そういう人が一番えらくすごいんだと思いました。」(美穂)

「一日一日死んでいくのをただまっている人ばかりじゃない事がわかりました。自分のある時間をむだにしないで、やりたい事をやって笑顔で死んでいくんだと思いました。私のひいおじいちゃんは、がんでなく血液の病気で死にました。私は一目も会えませんでした。病室には殺菌した白衣とマスク、サンダルをはかないと入れませんでした。」 (仁美)

弱音をはいてもあきらめないことに

私は感動した 北村さんの授業

北村さんに実際に来てもらって、春夫さんの闘病生活と作品についてを聞かせてもらった。

子どもたちもたくさん質問し、「みんなも聞かなくても、思った事を話してみようよ」という問いかけに、20分間途切れずに発言が続いた。

子どもたちの質問の中で印象的だったものは、「死んでしまった時、どんな気持ちでしたか」というものがあった。みやさんはこう答えた。

「悲しかったけど、悲しい気持ちと違う気持ちになった。それは、何だったかな……死んじゃ

ったと思うよりも、精一杯生きていたなという気持ちがあった。いつ死んじゃうか、ではなくていっしょうけんめい生きれる人だと感じていた。」

この言葉は、この一年間の命の授業の中で子どもたちが学んだ、もっとも大きいものだったのではないかと思う。

もうひとつは、北村春夫さんの作品に子どもたちが引き込まれたことが印象的だった。その絵を通して、春夫さんの「生」「生き方」を感じ取っていたのかもしれない。体もほとんど動かない中で作られていった作品に子どもたちは感動していたし、発言の主流もそう言った内容だった。

「この前甲斐さんに話を聞いたけど、やっぱり見る方向は同じでも、見方が違えば違うものがうつるから、いろんな人からいろいろな事を聞けてよかった。北村春夫さんは、だれから聞いてもすごい人だと感じた。北村さんの絵はとてせんさいでだった。うまかった。色使いもとてもうまくて、どうやったら、こんなふうに書けるんだと悩んじゃうくらいすごくて、でも手がマヒしているから、言っているわけじゃない。私はがんだからといってほめているわけじゃなくて、普通の絵としてほめてます。」（裕美）

「病院のことや、北村さんがどんな様子で絵をかいているのかなどがよく分かった。最後までがんばったけど死んじゃって残念だとは思ったけど、最後の最後までがんばった北村さんはすごいと思った。最後まで自分の好きな事をできてよかったと思った。」（誠）

「普段から絵とかがすきだったんだな—と思った。私がお医者さんに「すごく重い病気です」って言われたら後どれだけ生きられるかって聞いちゃうと思う。でも、そんなどうでもい事聞かないで今、生きている時間を大切にしようっていう考え方はすごいと思った。」（遼子）

「絵を見て、とっても絵が好きでいっしょうけんめい生きてた人だったんだなあと思いました。もしも、私が「もう直らない、もうすぐ死んでしまうよ」とか言われたら、今考えているみたいに前向きになんか生きられないと感じました。死ぬことじゃなく、生きることを目標にできるってすごいことなんだと、つくづく感じる事が出来ました。（ひさしく、です・ます調）」（綾子）

「死ぬ最後まで絵をかいていたなんてスゴイ。だって手も動かなくなってもあんまりよく見えないのに、絵をかけるなんてほんとにすごい。」（一慶）

「北村さんはすごい。体も思うように動かないのに最後までがんばってかけるなんて。私だったら、途中でイライラしてきて、やめちゃったり投げ出したりしてたと思う。色もとてもきれいだった。」（菜の葉）

「みんなはこだわらなかったけど、あの上下の鳥の絵が私としてはすごく不思議だった。ちょっとクサイけど、感情が表れる。みやさんが最後に「弱音を吐いた」って言ってたので少し分かったんだけど、充実している包み込むようなほわほわした感じと、雨がだーっと降ってくるような寒気のする感じ。ちょっと怖い感じ。どうしたらあんなに感情のような物を色や形に自分から作って表せるんだー？心の色だね、春夫さんの描く絵は。」（杏子）

「私も死ぬっていう感じより生きてる時間のほうが大事にしてたんだと思う。春夫さんは本当
にがんばりやなんだなと思った。絵をあきらめたりしないですっとかきつづけていたなんて。
私はえんぴつでもかけないのに。どうして春夫さんはかけたんだろう。たぶん「生きている藍
だ似かくぞ！」という気持ちだと思う。ふつうではかけない絵をかけたなんてすごいな。私も
3ヶ月くらいしかいきられなかったら、すぐにホスピスに行こう！そしたら幸せに死ぬかもし
れないから……………」 （陽子）

集団自決の問題にぶつかった時、子どもたちはその対極にこの「生きる」という姿勢から
得たものを持っていたように思う。そういった姿勢や考え方は、州平が感じた事に通じている
のではないだろうか。

「北村さんのお話はすごくいい話かったです。ゆう君と同じでぼくもおとうさんとおじいちゃん
がいなくてゆう君の気持ちがよくわかります。でも、お父さんや家族の人がいなくても、（悲し
んでいても）何もはじまらない。おとうさんはぼくが1年生に入るとき、ランドセルを取りに行
こうとしたときに、おとうさんはバイクで乗用車にぶつかりなくなってしまいました。でも、お
父さんの分まで生きたいとぼくは思う。北村さんありがとうございました。」 （州平）

まあちゃんの言いたかった事

3学期の授業を考える時、北山先生からまあちゃんのことを提案されて、生活教育に載っていた
白井さんの文章を読ませてもらった。その中で、いくつかの文がこの授業に踏み切る動機付け
になった。

- ・私は毎日の生活習慣を自分の力でやれるということが、生きている実感なのだと思っていて
感じた。
- ・生きるということを諦めなかった娘に生きるってすばらしいことなんだねと教えてもらった。
- ・娘もきっと生まれてきて良かったと思っているに違いない。そう信じたい。
- ・娘の生き様は、明日や未来があることがどんなにすばらしいことなのかを語っているように思
う。

白井さんの言葉は、この一年間子どもたちが学んできたこと、そして学ばせたかったこと
につながるものだった。そして、画集を見ていて、「スーホーの白い馬」を選んだのは、伊東先
生のこの絵にたいする文章を読んだからだ。

北村さんの作品にも強い関心とその本質のようなものを読み取った子どもたちを見ていて、
まあちゃんの絵は最後の教材にするのは、自然なことだと思った。

授業のポイントは2つあった。

1つは、祐斗が「まあちゃんは、白い馬を自分にたとえてかいたんじゃないかと思う」という
発言だった。そこから、発言がしばらく続いた。もう1つは、晶がまあちゃんが入院していた
時に手紙を書き、もらった返事を読んだことだった。この単元の1時間目が終わった後、晶が
「私、まあちゃんの手紙とってあるんだけど、持ってきたほうがいいかな？」とやってきたの
で、次の授業でみんなに紹介してほしいと話していた。

病院で、「太い注射や点滴の管をさして痛いけどむという所を、白馬に刺さっている矢と結
びつけて、子どもたちはまあちゃんの絵を読み取っていった。最後に、まあちゃんが言いたか

った事という題で文章を書いたが、15分たってもほとんどの子がえんぴつを置かなかった。

命どう宝それが1年間学んだ事

時間がなくて、最後の「命どう宝」をまとめるところまで、実践することができなかった。それがあれば、もう少しこの学習の意味が見えたように思うのだが。

子どもたちは、この学習の中で、命の尊さを感じ取ったのではないだろうか。生きることの大切さ、生きていこうとする人間のエネルギー……だから、命を粗末にすることに対して、様々にいかりを覚えたのではないか。

集団自決にこだわった子どもたち、どうして助かるのに自ら命を絶つようなことをするのか？それは皇民化教育というものに集約されていくが、その基調にあるものは、人命軽視・命をゴミのように扱うものだった。戦争とは、命をこんなにも粗末にし軽んじていくものなのかを、子どもたちは沖縄に行き行って学んだ。基地を学び、そこに対する問題意識は、地位協定の問題・本来平等になるようにあるための法律が、悪用されている。住民を粗末に扱う結果をもたらしている。墜落事故では一番大切にされるべき、負傷者はそのままにし、米兵が最優先され救助されていく。命を大切にせずに、何のための基地なのか？何のための法律なのか？子どもたちはそういうことを投げかけていたのではないかと思う。

結局のところ、子どもたちが1年間学んだのは、「命どう宝」であったと思う。その基調のようになったのが、この「死を通して命を考える」授業だったのではないか。そして、子どもたちの中に残り、育ったものは宮良ルリ先生が最後に話してくれたものだったと思う。

「美しい言葉にだまされて、物事の本質を見失わないようにして下さい。その事がいい事か、悪い事か判断に迷った時は、「命どう宝」それが命を大切にしているかどうかで判断して下さい。」